鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　1

昭和59年度発掘調査報告

浄妙寺旧境内遺跡
北条泰時・時頼邸跡
台山遺跡

昭和60年３月

鎌倉市教育委員会

序　　文

中世、日本の政治・経済・文化の中心であった鎌倉は、都市という性格上、現在の市街地の地下に豊富な埋蔵文化財を蔵しています。その状態は、中世の街が柱の１本１本までそのまま残っているといっても過言ではないでしょう。またその出土品は非常に高級な陶磁器・漆器から包丁や下駄などの日常生活用品に至るまで、多種多様なものがあります。これらの埋蔵文化財は、文献にはふれられていない日常生活の実体や、隠された事実を明瞭な形で私達の前に示してくれます。

ところが地中に埋没している埋蔵文化財は、ビルの建設等でこわされてしまうことが多々あります。このため事前に発掘調査を実施し、その記録を残しておく必要があります。本書はこうした発掘調査のうち、昭和59年度に鎌倉市教育委員会が各調査団にお願いして実施した、個人専用住宅・店舗併用住宅建設に伴う発掘調査の記録です。この報告書が鎌倉の歴史を明らかにするのに少しでも役立つことを祈念するとともに、調査実施に際してお世話になった各調査団をはじめ多くの方々に、心から御礼申し上げます。

鎌倉市教育委員会
教育長　尾　崎　實

例 言

1．本書は昭和59年度国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査にかかわる発掘調査報告書である。

2．本書は、以下に掲げる箇所の調査報告を収録したものである。

1）浄妙寺旧境内遺跡

2）北条泰時・時頼邸跡

3）台山遺跡

3．鎌倉市の委託を受け、鎌倉市教育委員会文化財保護課・神奈川県教育庁文化財保護課の指導により、各調査団が調査を実施した。

4．各調査地における、施主・期間・所在地等は、別表を参照されたい。

5．本調査報告は、調査地毎に各調査団がまとめたものを、鎌倉市教育委員会が編集したものである。

目　　次

序　文
例　言
目　次
I　はじめに …… 1
II　調査の概況 …… 3
1.　浄妙寺旧境内遺跡
例　言 …… 4
第1章　遺跡の歴史的環境 …… 5
第2章　調査の経過 …… 7
第3章　検出遺構 …… 7
第4章　出土遺物 …… 13
まとめ …… 17
2.　北条泰時・時頼邸跡
例　言 …… 28
第1章　調査地点の位置 …… 30
第2章　検出遺構 …… 30
第3章　出土遺物 …… 34
まとめ …… 42
3.　台山遺跡
例　言 …… 56
第1章　遺跡の位置及び歴史的環境 …… 58
第2章　調査の経過及び堆積土層 …… 59
第3章　検出遺構 …… 60
第4章　出土遺物 …… 62
まとめ …… 67

Ⅰ はじめに

発掘調査に至る経過及び発掘調査期間は以下のとおりである。

1 浄妙寺旧境内遺跡

鎌倉市浄妙寺字稲荷小路129番2に所在する。当遺跡は国指定史跡浄妙寺境内の関連遺跡であり、調査地点は、浄妙寺境内図によれば塔頭の慈済庵・金隆庵の位置に相当する。

昭和59年３月、建築確認申請に伴う事前相談があり、当該地に鉄筋コンクリート２階建の個人専用住宅建設計画があることが判明した。このため３月26日から同月29日まで坪掘りを行い、遺構の確認を行ったところ、良好な地形面、礎石、ピット 等を検出した。これに基づき昭和59年４月事業者と協議したが、当該計画に対する意志は固く、設計変更はできない旨回答があった。当該設計では遺構が破壊されてしまうため、県文化財保護課と協議したところ、個人専用住宅の建設であり、事業者の調査経費負担は難しいため、国庫・県費補助事業として事前発掘調査を実施するよう指導があった。これにより事業者と協議し、発掘調査を実施することで協議が整った。このため「土木工事等のための発掘に関する届出書」の提出を指導したところ昭和59年４月27日付で提出があり、同年５月８日付で県教育長からの通知があったため、これに基づき、鎌倉市が浄妙寺旧境内遺跡発掘調査団（団長　大三輪龍彦）に委託して発掘調査を実施した。なお、発掘調査深度は基礎の根切底を基準とした。

2 北条泰時・時頼邸跡

鎌倉市雪ノ下１丁目372番7に所在する。当遺跡は北条泰時・時頼の館跡と推定され、、鎌倉における北条氏の代表的館跡の１つであり、若宮幕府跡の一画であるとも推定されている。

昭和59年３月、鉄筋コンクリート造３階建店舗併用住宅を計画しているが、当該地の埋蔵文化財について取り扱いを協議したい旨、設計者から申し出があった。このための設計変更をうながしたが地盤が悪いため設計変更は不可能である旨、回答があった。当該設計では遺構が破壊されるため、昭和59年４月、隣接地の発掘調査資料を基に県文化財保護課と協議したところ店舗併用住宅の建設であり、事業者の調査経費負担は難しいため、国庫・県費補助事業として事前発掘調査を実施するよう指導があった。これに基づき事業者と協議し、発掘調査を実施することで協議が整った。このため「土木工事等のための 発掘に関する届出書」の提出を指導したところ昭和59年４月24日付で提出があり、同年５月14日付で県教育長からの通知があったので、これに基づき、鎌倉市が北条泰時・時頼邸跡発掘調査団（団長　吉田章一郎）に委託して発掘調査を実施した。

3 台山遺跡

鎌倉市山ノ内字藤源治874番2に所在する。当遺跡は北鎌倉駅西側丘陵東側斜面に存在する、縄文時代から室町時代後期にかけての複合遺跡である。

昭和59年８月、建築確認申請に伴う事前相談があり、当該地に鉄筋コンクリート造２階建の専用住宅建設計画があることが判明した。当該計画では遺構が破壊される可能性が強いため、県文化財保護課と協議したところ、(1)坪掘りを行って遺構の存在を確認すること、(2)設計変更に応じられず遺構が破壊される場合は、専用住宅の建設であり、事業者の経費負担が難しいため、国庫・県費補助事業として事前発掘調査を実施することとの指導があった。このため９月17・18日に坪掘りを行い遺構の確認を行ったところ、弥生時代の竪穴式住居跡を検出した。これに基づき事業者と協議したところ、設計変更には応じられないが発掘調査には協力する旨の回答があった。このため「土木工事等のための発掘に関する届出書」の提出を指導したところ、昭和59年９月20日付で提出があり、同日付で県教育長からの通知があった。これに基づき、鎌倉市が台山遺跡発掘調査団（団長　赤星直忠）に委託して発掘調査を実施した。なお、発掘調査深度は、基礎の根切底を基準とした。

表１　調査地区一覧表

No.	遺跡名	所在地	原因者	調査原因	遺跡種類	調査面積	現地調査期間
1	浄妙寺旧境内遺跡	浄妙寺字稲荷小路129番２	飯田英作	専用住宅	寺院	95m²	S59.5.14～S59.5.31
2	北条泰時・時頼邸跡	雪ノ下一丁目372番７	鈴木聖一 鈴木千波	店舗併用住宅	館	88m²	S59.7.17～S59.8.6
3	台山遺跡	山ノ内字藤源治874番２	保谷和雄 保谷三千雄	専用住宅	集落	50m²	S59.10.13～S59.10.23

II　調査の概況

1．浄妙寺旧境内遺跡

例　言

1．本書は鎌倉市浄妙寺字稲荷小跡129番2における飯田栄作氏邸新築工事に伴う発掘調査の報告である。

2．調査は鎌倉市の委託を受けて浄妙寺旧境内遺跡発掘調査団（団長　大三輪龍彦）が実施した。

3．調査団編成及び調査参加者名は本頁下段に示した。

4．本書は下記の３名が分担執筆した。

第１章、大三輪龍彦、第２・３・５章　原広志、第４章　福田誠又、報告書作成には執筆者の他に馬渕和雄、千葉滋、武淳一、藤松郁らの協力を得た。

5．本書に使用した写真は原広志、武淳一が撮影した。

6．鎌倉市教育委員会より適切な指導・助言を受けた。

調査団編成

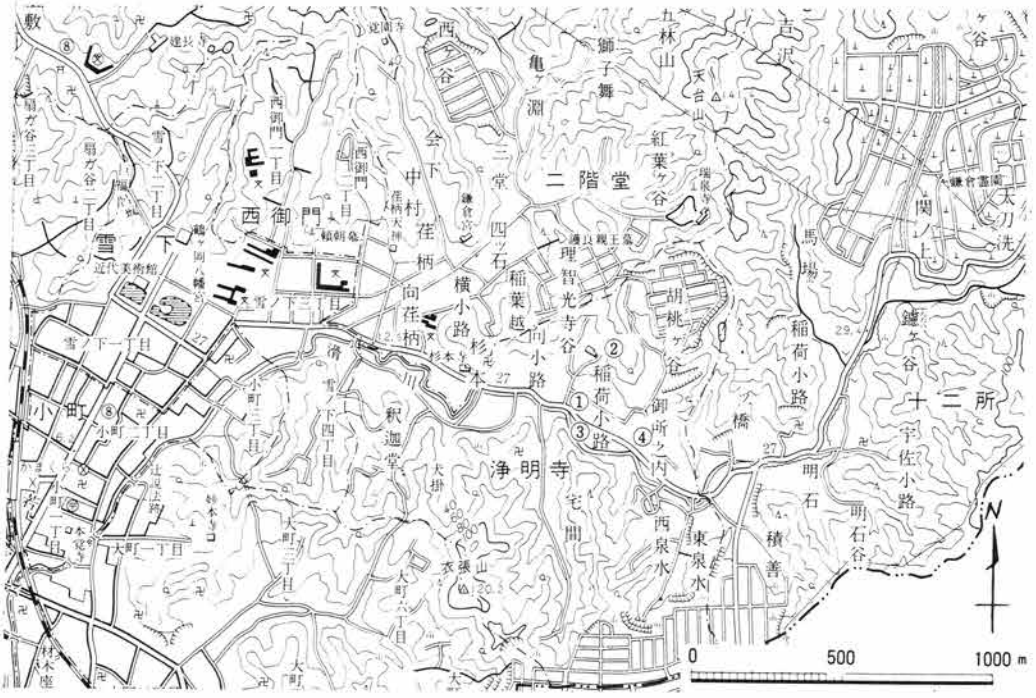
団長	大三輪龍彦
調査員	原広志
調査補助員	武淳一、千葉滋

第１章　遺跡の歴史的環境

遺跡は鎌倉市街地の北東部浄明寺地区に存在する鎌倉五山第五位の臨済宗浄妙寺の旧境内東部に位置する。浄妙寺の寺地は北に杉本寺背後の杉本城のある大蔵山の丘陵が西から張り出してきており、南は衣張山丘陵の北端があり、南側丘陵の山裾を東から西に向って滑川が流れていて、上流は六浦荘に通ずる朝比奈峠にまで達す。また滑川に沿うように現在の六浦街道が通じている。西には平安時代以来の古刹天台宗大蔵山杉本寺（大蔵観音堂）があり、東には足利公方屋敷跡や胡桃谷の大楽寺旧地が続く。西南には滑川を隔てて宅間谷があり、同じ臨済宗の功臣山報国建忠禅寺が現在も建っている。また南側東寄りには六浦街道をはさんで稲荷小路遺跡があり、昭和56年に発掘調査が行なわれ武家屋敷や側溝などの遺構群が確認されている。（報告書未刊）

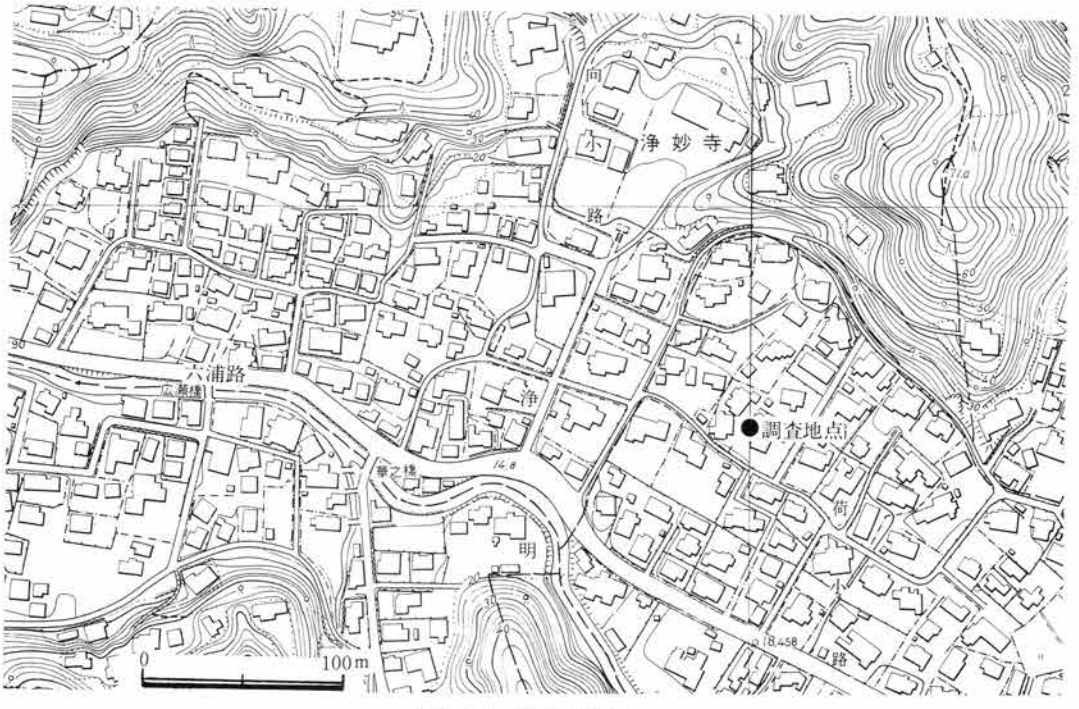
浄妙寺は山号は稲荷山と号し、開山は退耕行勇と伝える。開創の事情については一定せず諸説があるので、その幾つかを紹介しておくことにしたい。寺蔵の『稲荷山浄妙寺禅略記』では開創は文治４年（1188）開基は足利義兼、開山退耕行勇で寺号を初めは極楽寺と称したという。退耕行勇を開山とするについては『鶴岡八幡宮寺供僧次第』や『延宝伝燈録』がある。『本朝高僧伝』では開山は行勇としているが、開基は北条泰時といっている。文治４年と具体的に創建年時をあげるのは『浄妙寺略記』のみであるが、この書の記事が甚だ信ずるに当らないことは『鎌倉市史　社寺編』の中で証明されているので開創年時については不明とすべきものであろう。旧寺号を極楽寺と称したという点については「正嘉之元住相之極楽寺今浄改名」と『元享釈書』月峰了然の伝にあるので正嘉元年（1257）に浄妙寺が極楽寺としていたことは確実であるし、月峰了然の入寺は極楽寺が禅寺であったことを物語っていよう。

足利氏の中で法名を浄妙寺殿と号するのは足利貞氏である。この法名からみても足利貞氏と浄妙寺の間にはなみなみならぬ関係があったことがうかがえよう。これについて『鎌倉市史　社寺編』は貞氏が浄妙寺の中興開基であろうといっている。浄妙寺は足利氏との関係もあって南北朝以降に最も栄えた時期を迎えたものと思う。この最盛期の寺観はいかなるものであったのであろうか。浄妙寺には紙本淡彩の浄妙寺境内古図なる古絵図が１幅所蔵されている。この絵図については「当寺の伽藍が図のように完備していた頃に作成されたのではなく、昔の盛んな姿を想起して描かれたものであると考えられ、その時期の明確なことはわからないが、図の描法およびそれぞれ注記してある墨記の書体等を加味して、江戸時代に作られたとみられる。」（三浦勝男　『鎌倉の古絵図(1)』）従って、この絵図が14世紀当時の浄妙寺の様子を正確に伝えているとはいい難いが、参考のためにその様子を略述すれば、総門、山門、仏殿、法堂が南北一直線上に並び、法堂背後に方丈があり、更にその奥には開山堂と大檀那霊廟を描く。山門仏殿の西に文殊堂、禅堂、経堂、東に浴室・鐘楼・荒神堂を配して中心部については禅宗様伽藍配置を示す。また、伽藍の西には直心庵をはじめ万雲・宏証・禅昌・仏智・法勝・徳源・楞厳・五眸・瑞竜・東に聴泉・升林・磁済・金隆・東漸・知足の塔頭各庵が描れている。中心伽藍についてはあまりにも整いすぎていて容易に信じ難いが塔頭の位置関係については多少信じてもよいのではないかろうか。発掘調査地はおそらく東側塔頭群の一部に当っていると思われる。



①調査地点　②浄妙寺　③浄明寺稲荷小路遺跡　④公方屋敷跡

第1図　遺跡位置図



第2図　遺跡周辺図

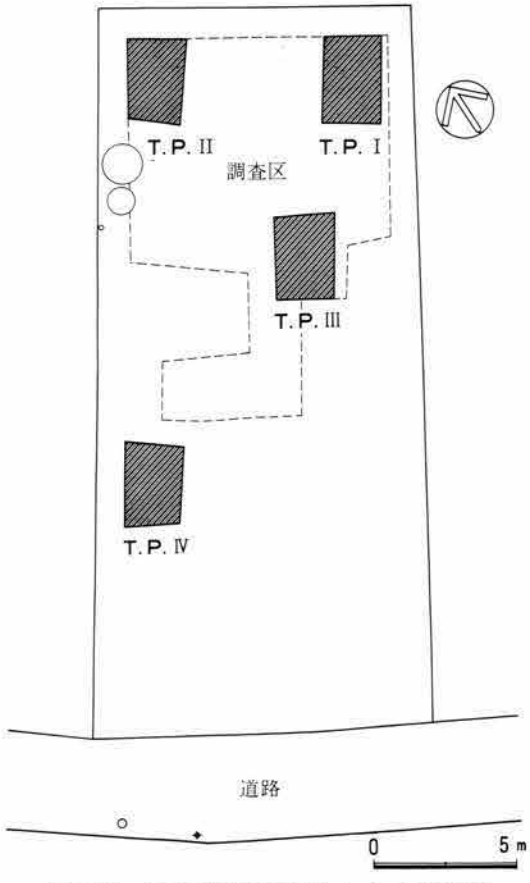
第２章　調査の経過

本遺跡に対する発掘調査は、鎌倉市教育委員会による試掘調査を経て実施された。

試掘調査は、建設予定地の内４ヶ所（Ｔ・ＰⅠ～Ⅵ）に試掘壙を設定し実施された。この調査は、遺構の有無や地表からの深さ、土層堆積状態などの把握に重点が置かれた。その結果、敷地内では地表下20～70cm余りは近代の埋立と現代攪乱であり、その下は旧水田耕作土と考えられる青味をおびた灰色粘土が堆積していた。この層の下には細砂層を挟んだ中世遺物を含む、２枚の生活面、(土丹地形面）が検出され、礎石、柱穴、土壙等の遺構を確認した。

本調査は、昭和59年５月14日から同年５月31日まで実施した。

調査区は、建築範囲内の約95㎡で、基礎掘削深度に合せて地表下約１ｍまで掘り下げた。本調査は試掘調査の結果を基にし、近・現代の客土と攪乱を重機によって除去し、その後人力により２面の遺構確認及び調査を行いつつ基礎掘削深度まで掘り下げた。その結果、南北朝時代から室町時代にかけての掘立柱建物跡２棟、井戸１基、土壙17基、溝１条、その他に柱穴が多数検出された。



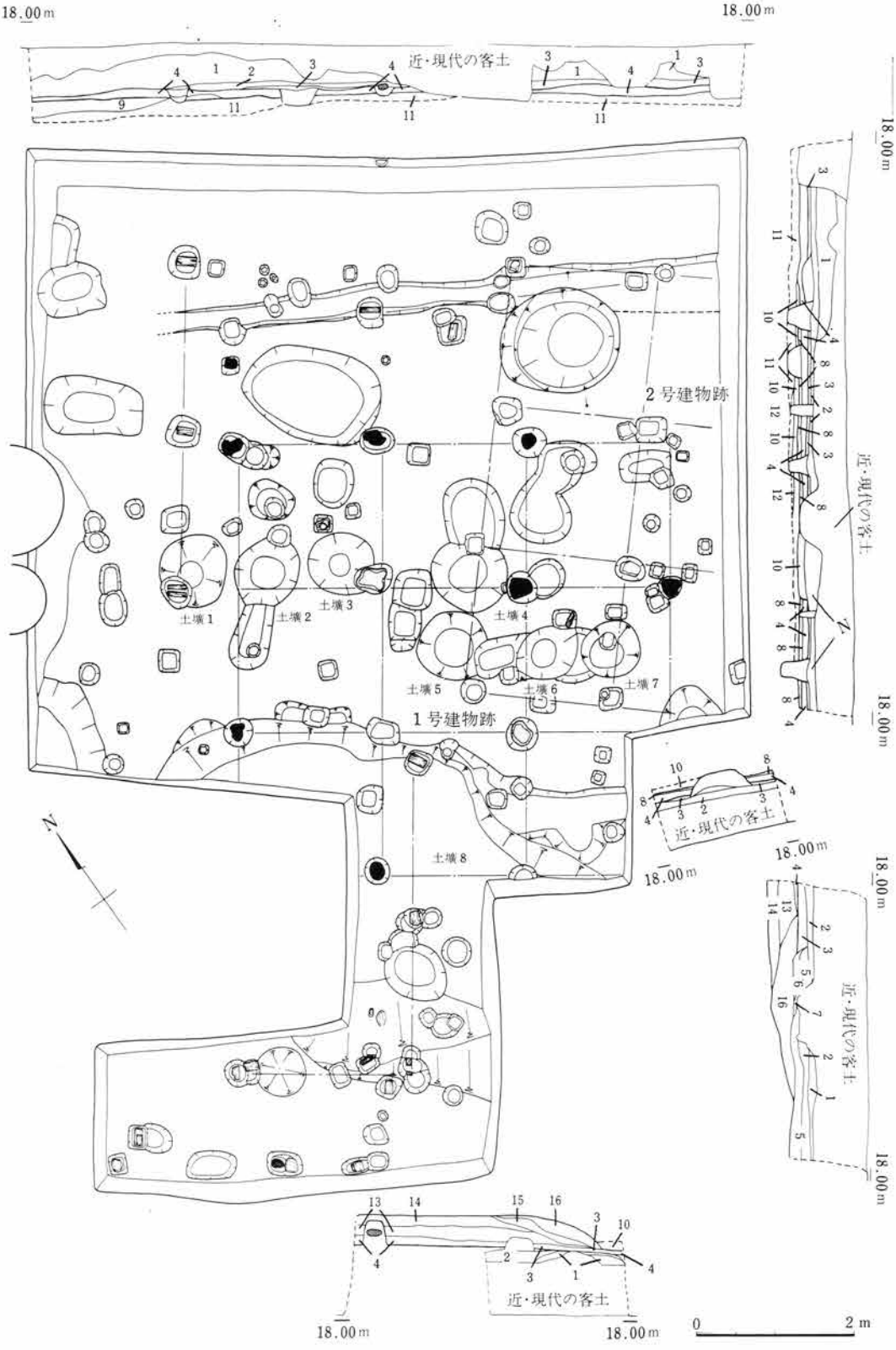
第３図　調査区及び試掘トレンチ配置図

第３章　検出遺構

1.上層の遺構

旧耕作土と考えられる粘土層下には厚さ２～10cmの黄褐色の細砂が堆積し、これを除去してみると、すぐに土丹（破砕泥岩）を敷き固めた地業面が現われた。土丹版築は発掘区全域にわたって検出され、この面上及び黄褐色細砂層上から遺構を確認した。

検出した遺構は掘立柱建物跡２棟、井戸跡１基、土壙15基、溝１条などである。



第4図　遺構全体図

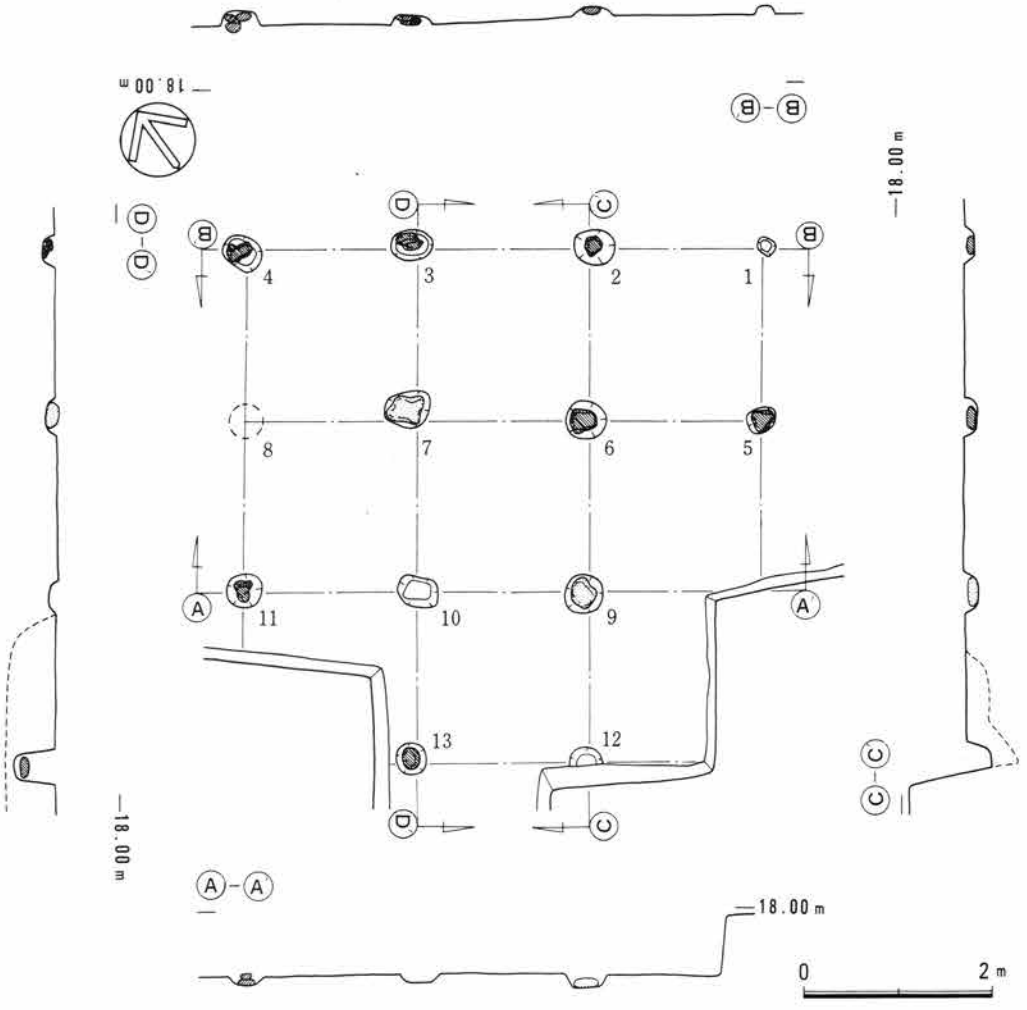
掘立柱建物跡

1号建物跡（第5図）

調査区中央やや東寄りで検出した掘立柱建物跡である。

柱間寸法は182cm～183cmを測り、南北3間（548cm）東西3間（547cm）の総柱建物と考えられる。建物南北軸はN-36°-Eである。更に東側調査区外に延びる可能性も考えられる。

柱穴は径25～50cm前後の円形を呈し、深さは確認面から約15cm前後のものが多いが、12・13柱穴のように30～40cmと深いものもある。10口の柱穴底部には礎石が残っていた。礎石は殆んどが径20～30cmの平たい伊豆石（安山岩）を使用していたが、4・9柱穴は鎌倉石（凝灰岩）であり、底部にほぼ水平に据えられている。3・4・11柱穴は小型の石を複数使用している。



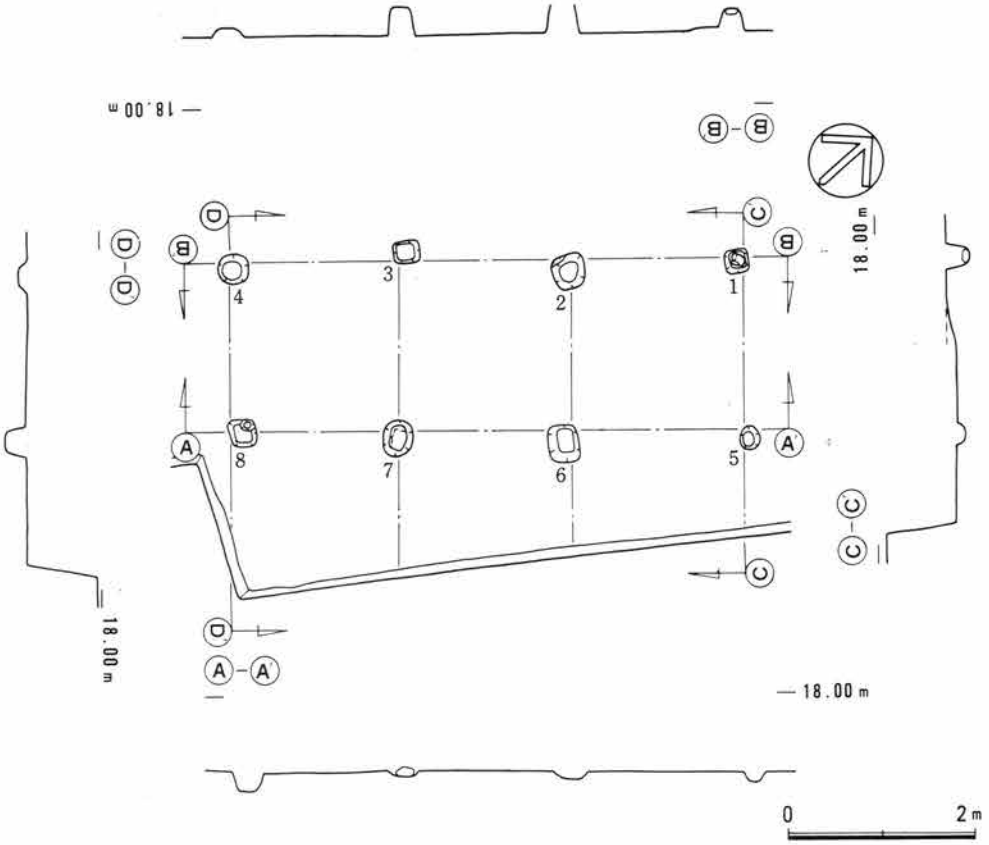
第5図　1号建物跡

2号建物跡（第6図）

調査区北東部で検出した掘立柱建物跡であり、1号建物跡からやや東にずれて重複する位置にある。

柱間寸法は181cm～183cmを測り南北3間（547cm）、東西1間（183cm）分を検出した。建物南北軸はN—41°—Eである。1号建物跡より5°余り東へ振れている。柱間寸法はほぼ一致している。南北3間、東西1間分だけが判明し、建物跡の南側は調査区外であるため全体の規模は不明である。

柱穴は径25～40cm前後の円形であるが、一部に方形のものも認められる。深さは確認面から約10～40cmで一定していない。柱穴底部に礎板と思われる木材の圧痕が2・3・6柱穴で認められた。また、1・7柱穴は土丹塊を礎石として底面に据えていた。覆土は細かい土丹や炭化物を少量含む灰褐色土である。



第6図　2号建物跡

柱穴列

調査区の北端東側、概ね溝に側って4口の柱穴を検出した。この柱穴列は調査区北側に延びて建

物を構築する可能性も存る。

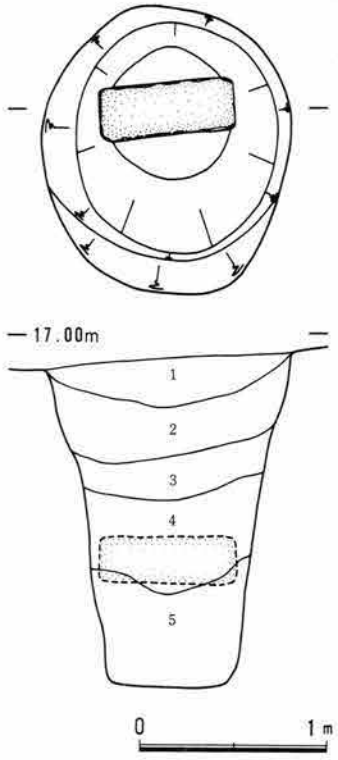
柱穴列は3間（518cm）で、西から180cm、165cm、173cmと各間にバラつきが認められる。柱穴は円形及び方形状を呈し、径30～40cm、深さ20cm前後である。1口には礎板が残存していた。

この他に調査区全域から70口余の柱穴が発見された。大半が直径25～30cmの円形を呈し、中には礎板や石を据えているものがみられた。長期に亘る居住空間であったことが暗示される。

井戸跡

調査区北東隅で検出した素掘りの井戸である。東西径160cm、南北径130cmのやや楕円形を呈し、壁は底面から約120cmまでが急角度をもって立上り、上端に近くなって壁が広がって緩やかになる。底面は円形を呈し径70cm余り、確認面から底部までのさは約180cmを測る。井戸内には井戸枠の痕跡はみられず、素掘りの井戸と考えられる。

覆土の上層は炭化物、土丹粒を多く含む暗褐色の粘質土で、中層～下層は青灰色の砂質土層で鎌倉石の切石や大型の土丹が投げ込まれた状態で出土した。遺物には常滑甕（第8図—16）、瀬戸の折縁皿（第8図—15）、土風炉（第8図—17）、火鉢（第8図—15）、手焙（第10図）、包丁（第12図—4）やかわらけ細片などが出土している。



1.暗褐色粘土層（炭化物・土丹粒含む）
2.暗褐色粘土層（5cm角土丹多量）
3.暗青灰砂質土層（貝ガラ・大土丹・鎌倉石）
4.暗灰砂質土層（貝ガラ粒多量）
5.暗青灰色砂質土層（貝ガラ粒少量）

第7図　井戸跡

土壙

調査区のほぼ中央付近に、1号建物跡の東西軸と平行する2列の土壙列を検出した。北側土壙列は、土壙1～4の4基で構成れており、西側の3基（土壙1～3）がほぼ接して在り、1基分の間隔をもって土壙4が存在する。南側土壙列は、土壙5～7の3基から構成されており、土壙5は土壙4の南側に接している。土壙3・4は1号建物跡によって一部壊されている。土壙の組合せはあるいは1～3と4～7と考えるべきかもしれない。

これらの土壙は径70～100cm前後の概ね円形を呈するもので、深さは確認面から30～50cmである。壁面がゆるやかな曲線を描いて底面に至る断面擂鉢状の土壙である。覆土は土丹小塊を多く含む暗褐色土層である。

この他に8基の土壙を検出したが、性格等は不明である。

溝

調査区東端の東側、1号建物跡の北約170cmで東西文向の浅い溝を検出した。

溝は東端で、幅65cm、深さ15cm程で、西へ向うにつれて狭く、浅い溝になり、西壁から180cmのところで消滅する。西端では、幅25cm、深さ５cmである。東側はさらに調査区外へ延びる。底面の標高は東端で17.3ｍ、西端で17.4ｍを測り、わずかではあるが東に傾斜している。断面形は下部の平担な「U」字型を呈する。

2.　下層の遺構

上層遺構群の確認面を構成する厚さ５～15cmの土丹版築、その下の厚さ３～10cmの青灰色細砂層を剝がすと、再び土丹版築の地形面が現われる。標高は17.2ｍ前後で、ほぼ水平である。

この面で検出した遺構は、柱穴21口、土壙２基などである。建物跡としては明確ではないが、、建物を構成したと考えられる柱穴列を検出した。

土壙

土壙８は調査区の南半部に存在する大土壙である。平面は不整円形を呈し、南北430cm、東西は両端が発掘区外に広がるため不明である。壁は緩い傾斜をもって底部に達し、底面は平担である。地業面からの深さは40cm程度である。覆土は灰褐色土層で、上層は炭化物、土丹粒を多量に含み、かわらけを中心とした遺物が完形品をを含め、多量に出土した。

柱穴・ピット

21口の柱穴、あるいは小土壙が検出された。柱穴には、底面に礎板を据えたものが10口確認された。発掘区域に制限され、明確な建物跡としては把握できなかったが、恐く発掘区外に延びて建物跡を構成すると思われる柱穴列を１号建物跡の西側と南側で検出した。

１号建物跡西側で検出した柱穴列は、３口からなり、柱穴は直径40cmの円形を呈するもので、深さは平均40cmを側り、ほぼ垂直に掘られている。柱穴にはそれぞれ礎板が残っていた。礎板は掘り方底部に、長軸を東西方向にしてほぼ水平に据えている。大きさは長さ30～35cm、幅15cmで板材を使用している。柱間の距離は、礎板の芯々で西から208cm・208cmである

１号建物跡南側で検出した柱穴列は4口の柱穴から構成されている。L字状に並んでいる柱穴は、直径30cm程の円形を呈し、深さは10～20cmで、上端部は土壙８によって削平されている。柱穴間の距離は芯々で南北方向が北から203cm・201cm、東西方向は212cmであった。３口の柱穴に礎板が現存している。

これらの柱穴列は、上層の１号建物跡とはぼ同一軸を示しているが、１・２号建物の柱間寸法が180cmを中心としているのに対し、下層の柱穴列は200cm以上であり、柱穴間の距離には多少の変化が認められる。

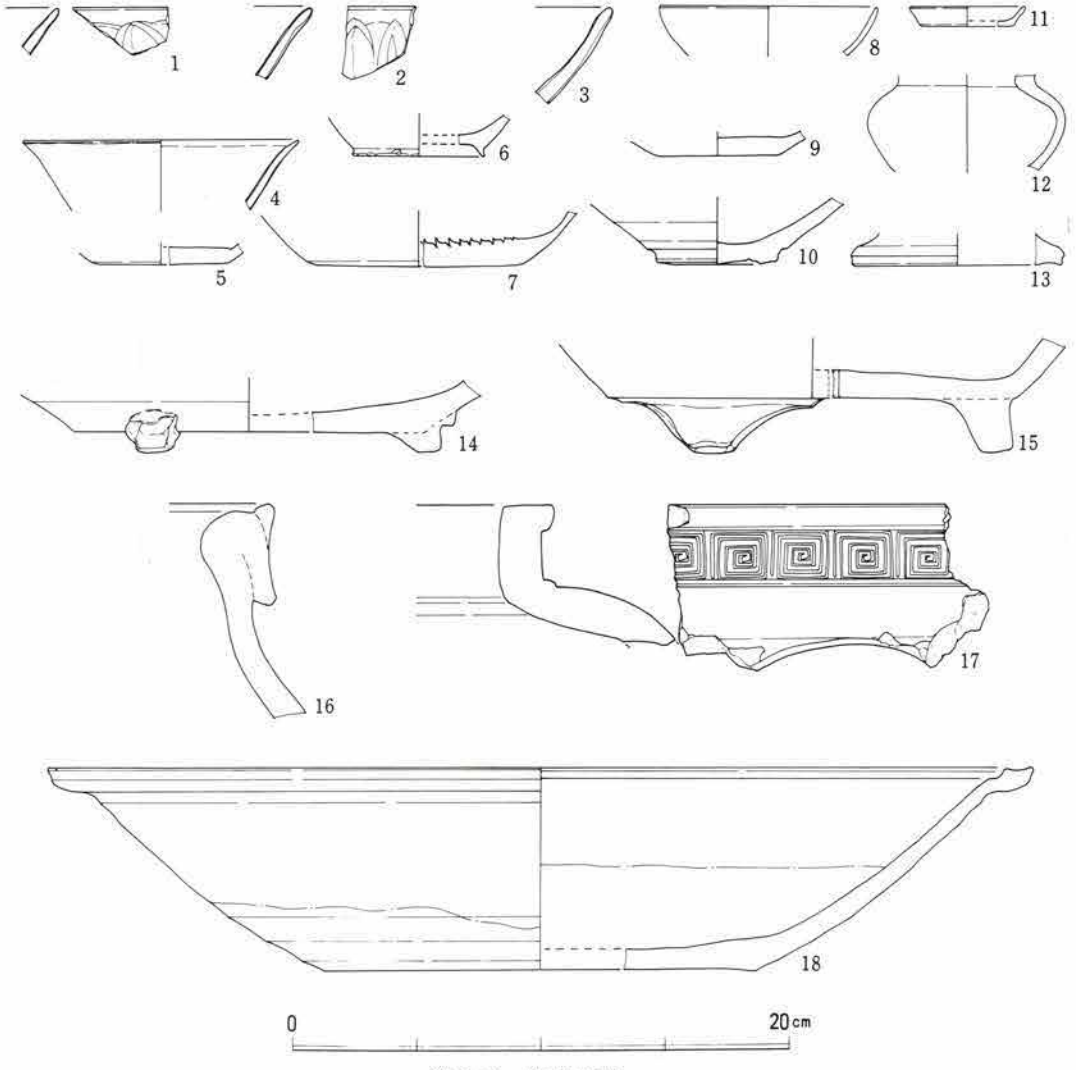
調査区北側・東側壁土層（**第４図**）

1.暗青灰色粘質土層（水田耕土）
2.茶褐色　〃　（水田耕土、鉄分多含）
3.黄褐色砂層（細かな山砂）
4.暗青灰色土層（土丹地業層）
5.黒灰色土（炭化物多量含）
6.灰褐色砂質土（土丹粒・炭化物少量含）
7.〃　粘質土（２cm角土丹含）
8.暗黄褐色砂層（細かな山砂）
9.茶褐色土層（土丹地業層）
10.黄褐色土層（土丹地業層）
11.灰褐色土層（土丹地業層）
12.暗褐色砂質土層
13.灰褐色粘質土層（土丹粒・炭化物多量含）
14.灰褐色　〃　（土丹粒・炭化物少量含）
15.灰褐色　〃　（土丹粒、部分的に炭化物含）
16.暗灰褐色粘質土層（土丹粒、炭化物少量含）

第4章　出土遺物

1.陶磁器類

遺跡全体からの陶磁器の出土はは少くない。土壙８、井戸からの出土が大半を占め若干遺構面か



第８図　陶磁器類

ら出土している。

舶載磁器（第８図―１～５、図版７―１・２）

１～３は青磁である。１・２は蓮弁文を削り出した碗、３は無文の大型の碗である。４・５は白磁である。口元の皿で底部まで釉のかかる製品である。上記の１～５はすべて土壙８の出土である。

国産陶器（第８図―６～18、図版７―３）

６は山茶碗である。上層遺構面上の出土で高台に糸痕を残す。精良なきめ細い胎土で美濃系と思われる。７は瀬戸のおろし皿で土壙８の出土である。底部は糸切りで体部は丸味を持つ。おしろ面は荒くヘラで斜めに切り込んである。８は瀬戸の入子で土壙８の出土である。薄い器壁を持つ。９は山皿で遺構面上の出土である。底部糸切で砂粒の混入の多い胎土である。10は瀬戸の削り出し高台を持つ碗である。器形は天目茶碗に似る。内面に黄褐色の釉がかかっている。１号建物跡No.６柱穴脇より出土。11は瀬戸の入子で土壙８の出土である内面のみに釉がかかる。12は瀬戸の小壺で上層遺構面出土である。頸部から肩にかけ釉が厚くかかっている。13は仏花瓶の底部と思われ上層遺構面から出土した。上面に厚く釉がかかっている。14は瀬戸の脚付きの折縁皿である。内底面にハケ塗りの釉がかかる。外面は底部とともにヘラ削りで、脚を貼り付けている。土壙８の出土である。15は脚付きの火鉢で井戸出土である。瓦質で無文であるが底部に穿が孔見られる。16は常滑甕の口縁部で井戸出土である。断面がN字状になり縁帯下部が頸部に貼り付いてしまっている。17は瓦質の土風炉である。頸部にスタンプによる雷文がまわる。器表に炭素を吸着させて研磨してある。井戸出土。18は瀬戸の折縁皿で井戸出土である。口径39.8cm、底径17cm、器高8.2cm を計る。体部下半から底部にかけてヘラ削りを施し、内面上半から外面上半まで釉がかけられている。

舶載品などは、若干年代的に古くなると思われるが他の遺物は14世紀後半以降のものがほとんどである。かわらけも含めて、この遺跡の中心的年代を示していると思われる。

かわらけ（第９図、図版８）

出土遺物の約80％を占めている。そのほとんどが土壙８より出土している。このかわらけを形態、胎土により分類してみた。

Ａ類、体部が丸みをおび内湾気味になる。器壁が薄く胎土もきめ細いもの。

Ｂ類、体部が丸味をおびるが内湾気味にならず、開きぎみになる。器壁は薄く胎土も精良なもの。

Ｃ類、体部が丸味をおびるが器壁が厚くなり、胎土も素地が荒くなり混和されている砂も大粒になるもの。

Ｄ類、体部が下半で陵が付き器壁も厚く、胎土も素地が荒くなるもの。

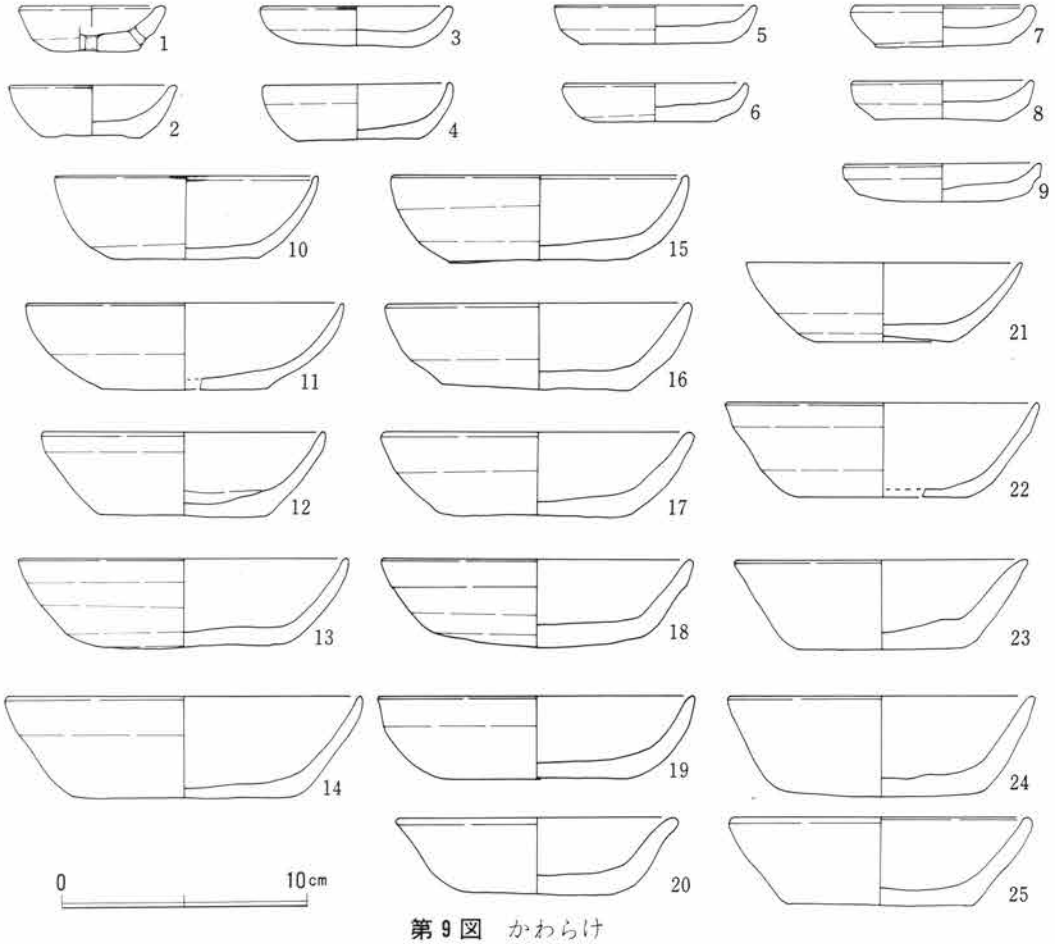
Ｅ類、体部が口端部に直線的に開き立ちあがり、器高も高くなる。器壁は薄く胎土も精良なもの。

Ｆ類、体部が大きく開きぎみに立ちあがる。器壁も厚く胎土も混和物が多く荒いもの。

Ｇ類、底部近くは丸味をおびるが口端部にむかって大きく外反してゆく。器壁も厚く胎土も荒いもの。

この様に大別してみた。鎌倉時代前半の頃にともなう、手づくねなどの器形は認められない。

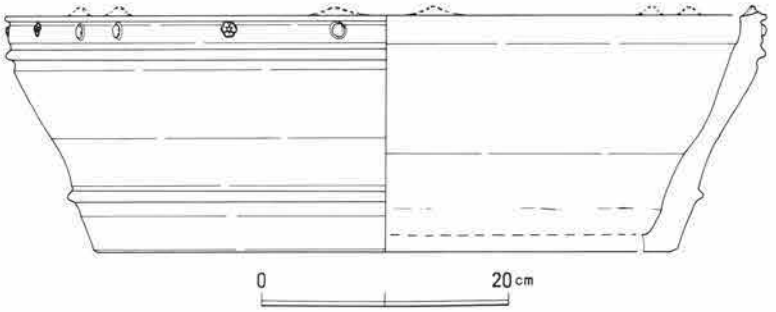
1・2はF類である。土壙8の出土で、1には2ヶ所穿孔が見られる、2は口端部にタールが付着している。3・5・6はC類である。土壙8の出土で、3は口端部にタールの付着が見られる。4はA類で、遺構面上の出土である。10・11はA類である。器壁も薄く丁寧な作りである。10の口端部にはタールが付着する。12～14はB類である。A類同様に薄手の丁寧な作りである。15・16はC類である。器壁が厚くA・B類の胎土とは大きく異なり素地も荒く混和されている砂粒も大きなものである。10～16までは土壙8の出土である。17～19はD類である。体部下半にヨコナデにより陵が付く。17・18は土壙8、18は遺構面上の出土である。20はG類である。他のものより全体にやや赤味が多く感じられる。大きく口端が外反していて、他のかわらけと明瞭に区別出来る。上層の遺構群の柱穴から出土。21・22はE類である。土壙8の出土で器壁も薄く胎土も精良土である。底部より直線的に口端にむかって体部が開いて行く。23～25はF類である。体部が直線的に開き器壁も厚いものである。25だけが底部が大きく異なった印象を受ける。23～25は上層遺構面上の出土である。これらのかわらけに年代をあたえるとしたら、A～E類が14世紀後半、F類が15世紀代、G類が16世紀以後に位置付けられると思われる。ただし25はF類と分類したが若干古くなると思われる。



第9図 かわらけ

手焙り（第10図、図版７）

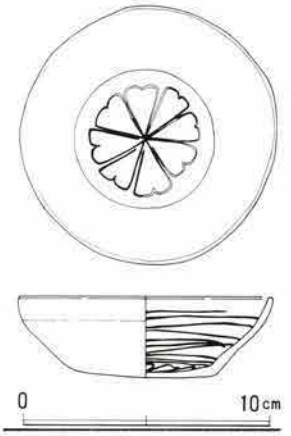
土器質の手焙りで、井戸の出土である。口径62cm、底径47cm、器高19cmを計る。胎土は荒く内部まで焼きしまっていない。体部外面の上半に２条、下半に１条の突帯がまわる。上半の２条の突帯の間には、珠文が２つを組にして８ヶ所（推定）に貼付してその間に花文のスタンプを押している。この様に珠文の付く手焙りは14世紀後半に多く見られるものであるが、その多くは連珠文でありこの様な形になるものは少くない。又口径が62cmもありこの様な大型の手焙りは、鎌倉市内では光明寺裏遺跡、千葉地遺跡などでも若干出土している。



第10図　手焙り

瓦器碗（第11図、図版８）

胎土は水簸した素地の細い粘土を使い、器表に炭素を吸着させているので全体的黒色を呈する。口縁部はやや肥厚し内湾気味になり、内面には荒く暗文が施されている。内底面には８弁の菊花文が描かれている。外面下半部１ヶ所ヘラによる押し込みが見られるが、輪花にはならない。土壙８の出土である。



第11図　瓦器碗

2.石製品（第12図―１～３、図版７）

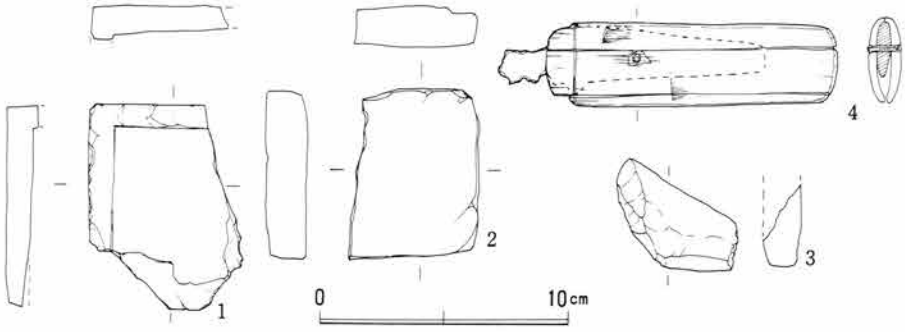
１は硯で上層遺構面上の出土である。全体の約４分の１程度の破片である。陵部分のみで縁は欠けている。粘板岩製である。

２は砥石で上層遺構面上の出土である。破片であるが表面には使用痕が認められる。

３は滑石で土壙８の出土である。石鍋を転用していると思われるが、破片が小さいために用途は不明である。

3.金属製品（第12図４、図版７）

４は包丁の柄で井戸跡の出土である。柄長11.7cm、幅3.4cm、厚さ1.3cmを測る。



第12図　石製品・金属製品

第5章　まとめ

今回の調査は、個人住宅建築に先立つ事前調査である。発掘深度は基礎掘削深度に合せ、地表下約1ｍまでとしたため、ごく断片的な資料しか得られなかった。しかし、調査地の北東側には国指定史跡浄妙寺境内が在り、寺蔵する旧境内図（近世所作）によれば、調査地は境内東側の塔頭域に当るため、立地そのものからも遺跡の性格をある程度推測できるように思われる。

検出した遺構は、上層・下層の二期の遺構に分かれる。上層で検出した掘立柱建物は、1号建物跡と2号建物跡の軸方位がずれていたが、1号建物跡と溝、擂鉢状の土壙列はほぼ同一軸を示していた。下層で検出した柱穴列は発掘区域外に延びると思われ、全体は不明だが建物の一部であると考えられる。また、この柱穴列は1号建物跡と軸方位が一致している。

調査区中央で検出した擂鉢状の土壙については、鎌倉市内でも2・3の類例が調査されており、光明寺裏遺跡(註1)、御成町806—3番地点(註2)の報告では常滑などの大甕の据え方であると考えられている。又、諏訪東遺跡(註3)、南御門遺跡(註4)、小町一丁目309番5地点(註5)の調査では常滑の大甕を埋設した土壙が検出されている。今回検出した擂鉢状土壙内からは大甕は出土していないが、形状や配置等から大甕を据えられていた土壙と考えたい。

出土遺物では、こね鉢・瀬戸の折縁皿・おろし皿・常滑焼の甕・手焙り・かわらけ等の生活用具が出土している。さらに仏花瓶や瓦質の土風炉・瀬戸の天目茶碗・小壺などの仏器や茶道具が出土している。

以上のことから、調査地は確認された遺構・遺物からみて生活的要素の強い空間であり、浄妙寺旧境内図によれば、慈済庵、金隆庵の位置に当るため、浄妙寺の塔頭域であると想定したい。遺跡の年代については、出土したかわらけ、瀬戸、常滑の編年により14世紀後半以降～15世紀にかけての時期が中心的年代と考えられる。それ以前の時期については掘り下げを行っていないため不明である。

註1　北区鎌倉常園内遺跡発掘調査団「光明寺裏遺跡」東京都北区教育委員会、1980年

註2　鎌倉考古学研究所調査報告第2集「御成町806—3番地地点」鎌倉考古学研究所、1982年

註３　昭和56年調査、報告書作成中。斉木秀雄氏の御教示による。又、大三輪龍彦編「中世鎌倉発掘」有隣堂、1983年。Ｐ84及び「図録　掘り出された鎌倉」鎌倉考古学研究所、1981年口絵５、Ｐ18の写真参照。

註４　昭和56年調査、報告書作成中。

註５　斉木秀雄「小町一丁目309番5地点発掘調査報告」（推定）藤内定員邸跡発掘調査団、1983年

▲ 1．上層の遺構全景（南から）

▲ 2．1号建物跡（西から）

図版2

▶1．1号建物跡（北から）

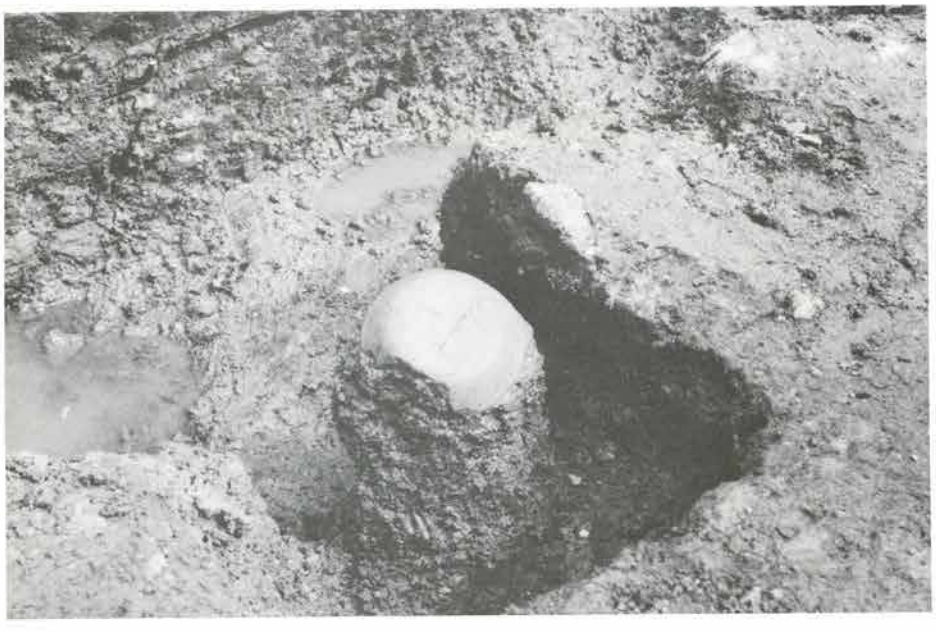
▲ 2．土壙列（東から）

▶3．井戸跡（東から）

◀1・1号建物跡6柱穴（北から）

▲2．1号建物跡3柱穴（西から）

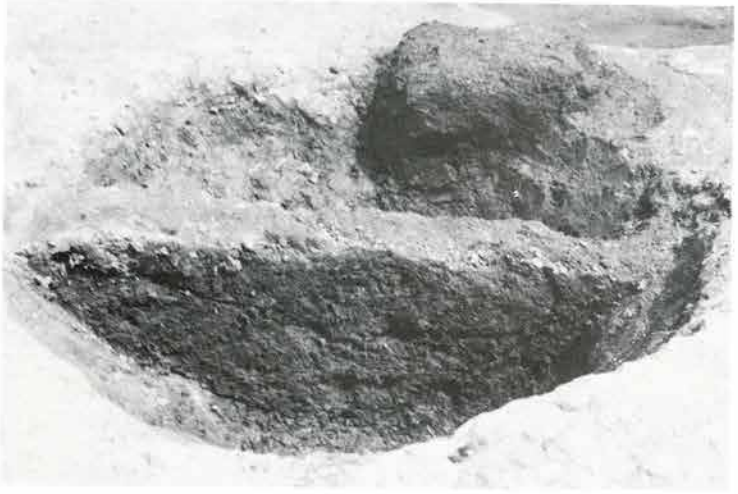
▶3・角柱出土状況（土壙8南）



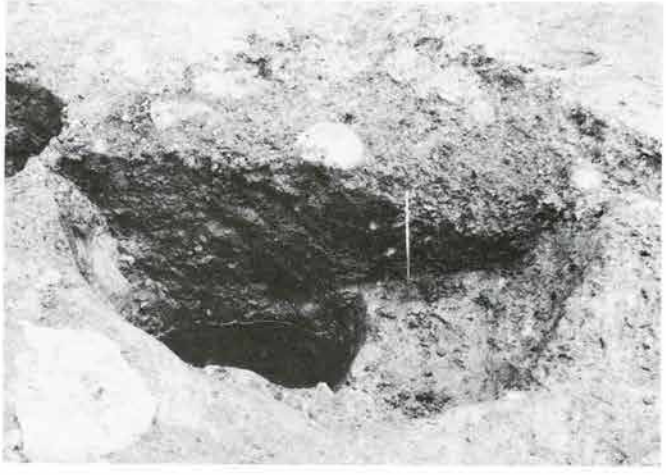
◀4・上層遺構群のかわらけ出土状況

図版4

▶1．土壙2土層堆積（西から）



◀2．土壙3土層堆積（西から）



▶土壙7土層堆積（西から）

▲1. 下層遺構全景（南から）

◀2. 土壙8土層堆積（北から）

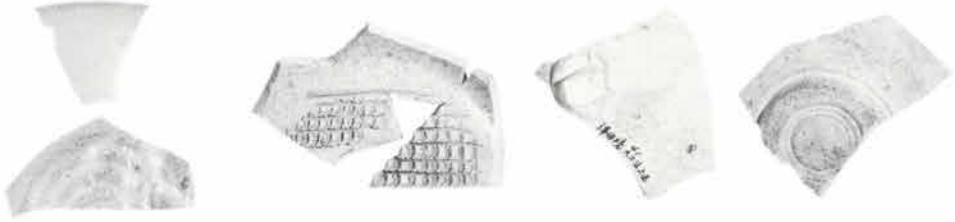
図版6

◀1・調査区北壁土層堆積（西側部）

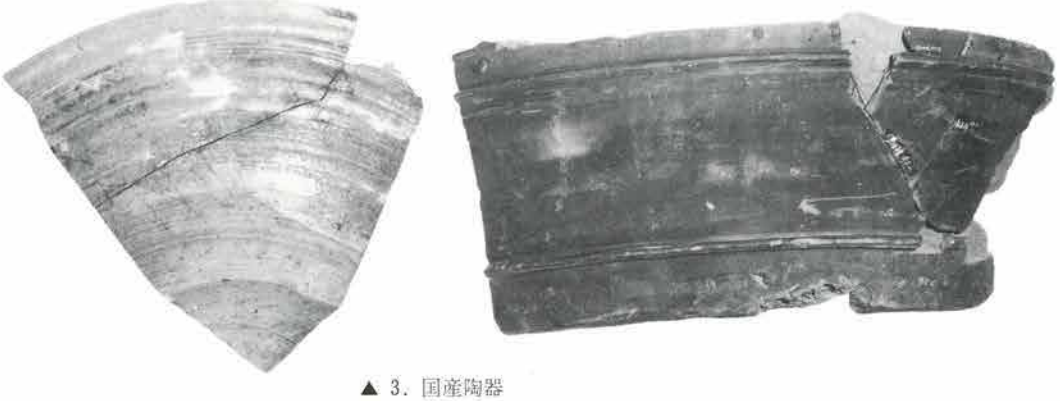
▶2・調査東壁土層堆積（北側部）

◀3・同　上（南側部）

◀1．青磁



▲ 2．白 磁



▲ 3．国産陶器

▲ 石製品（硯・滑石・砥石）

▶包丁（柄部分）

図版8

7

8

5

3

1

10（A類）

2

13（B類）

15（C類）

18（D類）

22（E類）

▼瓦　器　碗

24（F類）

20（G類）

2．北条泰時・時頼邸跡

例　言

1.本報は、鎌倉市雪ノ下一丁目372番—7に店舗併用住宅が建設されるに先立って実施された発掘調査の報告書である

2.発掘調査は国庫補助事業として、鎌倉市が発掘調査団に委託して実施した。調査期間は昭和59年7月17日から同年8月6日までである。

3.調査団の編成は以下のとおり。

団長	吉田章一郎
主任調査員	馬渕和雄
調査員	浜口康
調査補助員	藤松郁・菊川英政
調査協力機関	株式会社金子建設

4.本報は、浜口が図版を作成し、原稿執筆には馬渕があたった。使用した写真は遺構・遺物とも馬渕が撮影した。また、第5図下半部に掲載した雪ノ下一丁目371番—1地点の遺構概念図は、同地点発掘調査団の許可を得て使用させていただいた。記して感謝の意を表したい。

伝 北条泰時・時頼邸
（県遺跡台帳No.282による）
1. 調査地点（雪ノ下丁目372番―7地点）
2. 北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目371番―1地点）
3. 小町二丁目345番　2地点遺跡
4. 伝藤内定員屋敷遺跡（スイミングスクール）
5. 伝藤内定員屋敷遺跡（松風堂）
6. 伝藤内定員屋敷遺跡（島森書店）
7. 伝藤内定員屋敷遺跡（新中央公民館）
8. 本覚寺遺跡
9. 二の鳥居西遺跡
10. 小町2丁目65番地21号地点遺跡（松秀ビル）
11. 小町1丁目75番地1号地点遺跡（カトレアビル）
12. 鶴岡八幡宮境内遺跡（研修道場）
13. 鶴岡八幡宮境内遺跡（直会殿）
14. 鶴岡八幡宮境内遺跡（国宝館）
×印はその他の調査地点

第1図　調査地点位置図

第1章　調査地点の位置

若宮大路三の鳥居から約120m程材木座海岸寄りにあって、大路東側に臨んでいる。神奈川県遺跡台帳には、横大路東半分を北辺とし、若宮大路と小町大路を西・東辺とした南北220m近い方形の地域が「北条泰時・時頼邸」として記載されており(台帳No.282)、調査地点はこの地域の西辺中央部に位置している。

『吾妻鏡』によると、当初大倉にあった御所（幕府）が建保五年（1217）に焼失したので、嘉禄元年（1225）に「宇津宮辻子」の南側61丈（約184m）に移転したとあり(宇津宮辻子御所)(1)、さらに建長四年（1252）に、「若宮大路の東の頬」に新たに御所を造営したとある(若宮御所)(2)。今日宇津宮辻子と呼ばれている場所は、北条泰時・時頼邸として県遺跡台帳に載っている方形の地域の、南辺を走る路地のことであるが、これが往時のものと同一であるという確証はない。若宮御所についても場所に二説あり、宇津宮辻子御所と同一郭内にあるとするものと、北側に移動したとするものとに分れている。後者であれば、宇津宮辻子御所の北隣りには泰時の正亭があるはずなので、御所が北方に移動すれば当然、泰時邸も敷地の変更を余儀なくされたことは確実であるが、『吾妻鏡』にこの点の記述はない。

この近辺を発掘調査するのはこれで二度目である。最初の調査地点は今回の調査地点から約15m南の雪ノ下一丁目371番—1で実施され、若宮大路に平行して南北に走る数条の溝を検出した。またこの溝の底面からは「一丈伊北太郎跡」「一丈 南くにの井の四郎入道跡」と書かれた二枚の木簡が出土しており(3)、調査地点近辺の性格を追及する上で有力な手掛りを提供していよう。

註

(1)　『吾妻鏡』嘉禄元年十月二十日条

(2)　『吾妻鏡』嘉禎二年三月十四日条等

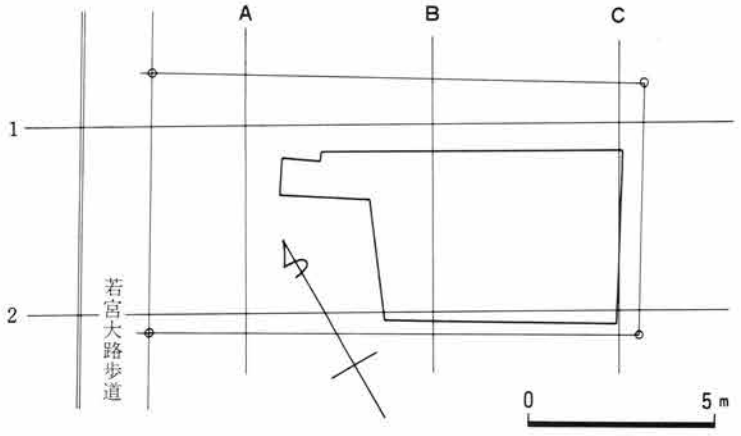
(3)　馬渕和雄「中世鎌倉若宮大路側溝出土の木簡」(『日本歴史』第439号—1984年12月)

第2章　検出遺構

調査にあたっては、まず若宮大路にほぼ平行した、南北の基軸を5mおきに設け、さらにこれに直交する基軸を5mおきに設けて測量方眼とし、南北軸線には数字を、東西軸線にはアルファベットを付して、各々の軸線交点の呼称をその南東側の方眼区画に充てた。

地表下約70cm前後まで近・現代の客土が入っており、遺構確認面はこの客土を排除するとすぐに現われる。遺構確認面は調査区東壁から約2m前後が地山黒褐色粘質土で、面上から数口の柱穴・土壙などを検出した。この面から西側は、遺物を多く含む灰褐色砂質土で、精査の結果、中～近世若宮大路側溝の覆土であることを確認した。また、黒褐色粘質土面上には、人の往来で踏まれたよ

うな痕跡がなく、上面に包含層も認められないことから、削平を受けている、と判断した。



第2図　調査区配置図

1 黒褐色粘質土上面の遺構

柱穴

８口を検出したが、径・深さ・覆土ともに様々で、建築としての秩序も認められなかった。互いに殆んど切合っていないため、新旧は不明であるが、Ｐ１・５・６・７は覆土からみて近世以降のものであると思われる。Ｐ２・３・４・８は土丹小塊混りの暗褐色土で、出土のかわらけ片からみても中世期に属すると思われるが、詳しい年代は不明である。このうちＰ２は後述する土壙１と、溝状の細くて不明瞭な落込みでつながっており、何らかの関連のあったことを窺わせる。

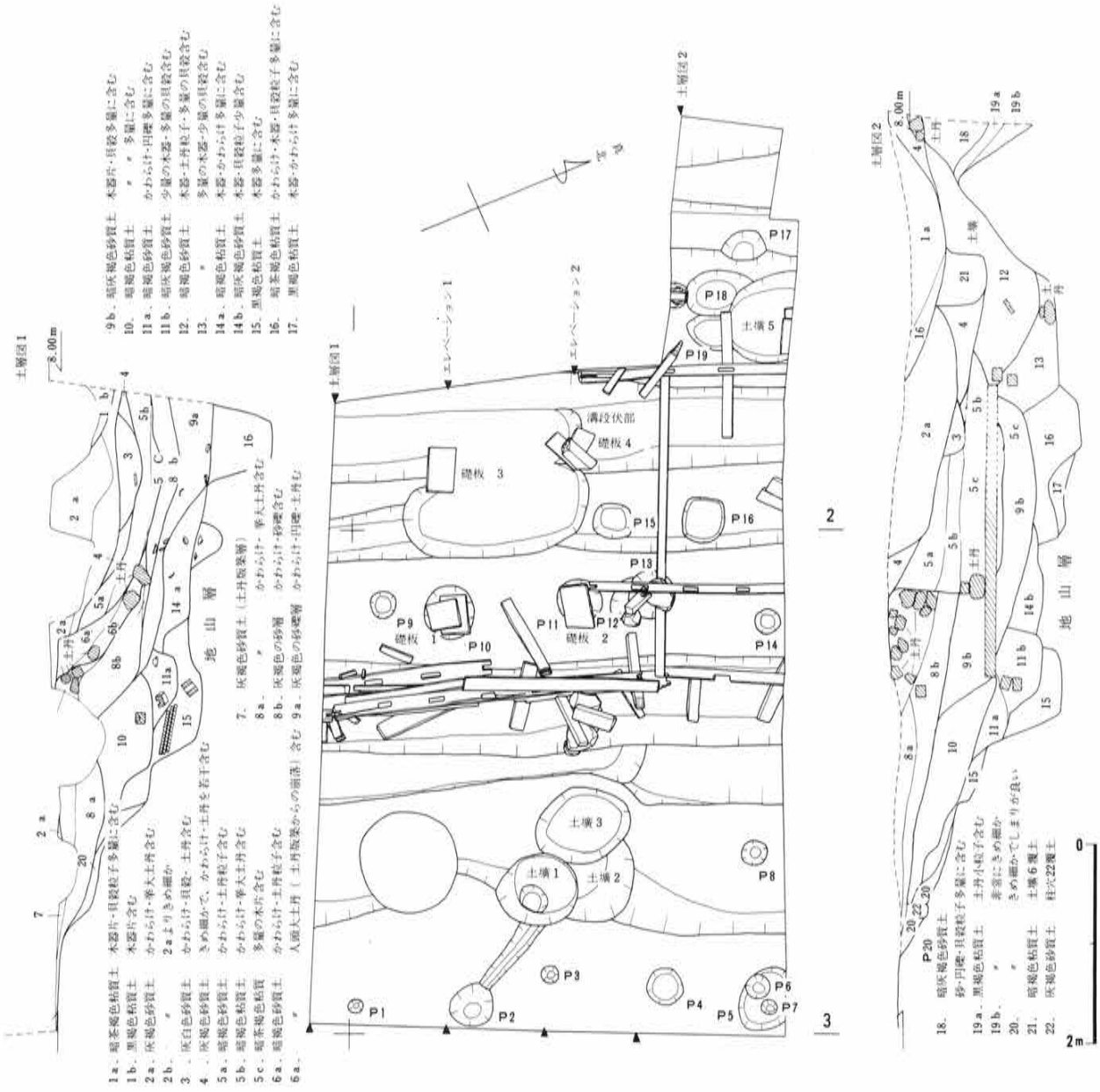
土壙

互いに重複した形で３基を検出した。

土壙１―２・３のいずれよりも新しい。平面形は円形で直径約80cm、深さ130cm、壁面はほぼ垂直に切り立っており、底面には径約40cm、深さ12～13cmの土壙状の落込みがある。形状からみて、素掘りの井戸である可能性がある。覆土は暗褐色破質土で半人頭大～人頭大の河原石(「伊豆石」)や土丹塊が10数点投棄されていた。また南東方面にあるＰ２は、細い溝状の落込みで土壙１とつながっており、付属的な施設であったことが判る。

土壙２―３を切り、１に切られる。平面形はほぼ円形で、擂鉢状の断面形を呈する。直径約95cm、深さ約40cmで、覆土は土丹小塊を多く含む暗褐色粘質土である。

土壙３―３基の中では最も古い。ほぼ円形の平面形を持ち、直径約90cm、深さ約40cm、壁面はかなり直立気味で、底面は平たい。覆土は地山黒褐色土の崩土を多く含む暗褐色粘質土である。


土層図1
8.00m
1a. 暗茶褐色粘質土　木器片・貝殻粒子多量に含む
1b. 黒褐色粘質土　木器片含む
2a. 灰褐色砂質土　かわらけ・拳大土丹含む
2b. 〃　2aより きめ細か
3. 灰白色砂質土　かわらけ・貝殻・土丹含む
4. 灰褐色砂質土　きめ細かで、かわらけ・土丹を若干含む
5a. 暗褐色砂質土　かわらけ・土丹粒子含む
5b. 暗褐色粘質土　かわらけ・拳大土丹含む
5c. 暗茶褐色粘質　多量の木片含む
6a. 暗褐色砂質土　かわらけ・土丹粒子含む
6a. 〃　人頭大土丹（土丹版築からの崩落）含む
9b. 暗灰褐色砂質土　木器片・貝殻多量に含む
10. 暗褐色粘質土　〃　多量に含む
11a. 暗褐色砂質土　かわらけ・円礫多量に含む
11b. 暗灰褐色砂質土　少量の木器・多量の貝殻含む
12. 暗褐色砂質土　木器・土丹粒子・多量の貝殻含む
13. 〃　多量の木器・少量の貝殻含む
14a. 暗褐色粘質土　木器・かわらけ多量に含む
14b. 暗灰褐色砂質土　木器・貝殻粒子少量含む
15. 黒褐色粘質土　木器多量に含む
16. 暗茶褐色粘質土　かわらけ・木器・貝殻粒子多量に含む
17. 黒褐色粘質土　木器・かわらけ多量に含む
地山層
7. 灰褐色砂質土（土丹版築層）
8a. 〃　かわらけ・拳大土丹含む
8b. 灰褐色の砂層　かわらけ・砂礫含む
9a. 灰褐色の砂礫層　かわらけ・円礫・土丹も
土層図1
土層図2
エレベーション1
エレベーション2
溝段伏部
礎板 1
礎板 2
礎板 3
礎板 4
土壙1
土壙2
土壙3
土壙5
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
2
3
土層図2
8.00m
18. 暗灰褐色砂質土　砂・円礫・貝殻粒子多量に含む
19a. 黒褐色粘質土　土丹小粒子含む
19b. 〃　非常にきめ細かきめ細かでしまりが良い
20. 〃
21. 暗褐色粘質土　土壙6覆土
22. 灰褐色砂質土　柱穴22覆土
地山層
0
2m

第3図　遺構全図・土層図

2 .溝と溝中の遺構

溝

先述の通り、地山黒褐色粘質土は調査区東壁から西に約２ｍを過ぎると、溝の上層覆土である灰褐色粘質土になる。この溝は若宮大路に平行して南北に走っており、先頃調査した雪ノ下一丁目371番―１地点で検出した溝の続きであると思われる。

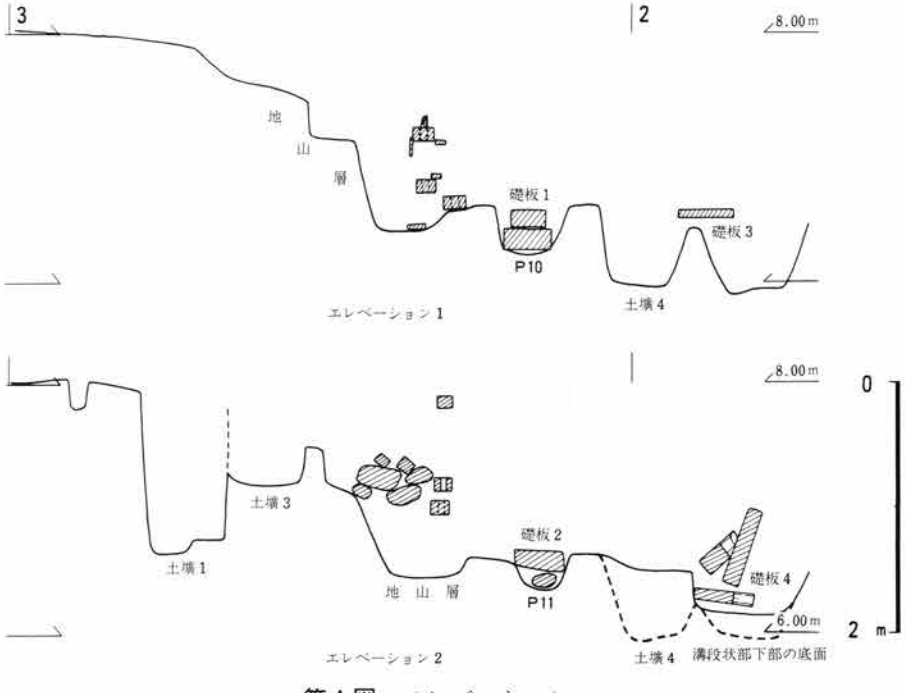
土層断面の観察から、この溝は10回に近い改修が施こされていることが判明した。細かな浚渫を含めると掘り直しは15回に及んでおり、中世から近世まで一貫して使用されていたことが窺える。

近世に相当すると思われる溝は、土層断面の１～４までであり、この頃は概ね皿状の断面を持っている。上層が削平されているため、幅などは不明である。護岸施設らしきものは見当らず、中世期よりも幾分雑な造作であると言える。

中世の溝には、土層断面図５以下の番号が相当すると考えられるが、近世に較べて壁面の傾斜がやや急であり、11番以下の古い時期になると、下半部が逆台形状を呈する。

調査区北西角を拡張すると更に西に向って急傾斜の落込みが認められたが（土層番号18・19)、それ以上の拡張はできなかった。

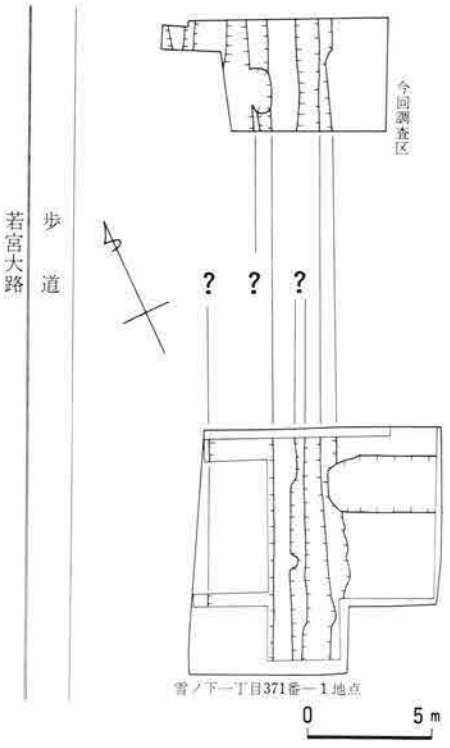
溝中には、幅10～12cm（３～４寸か）の角材が、南北に平行して約３ｍ（10尺か）を隔てて置かれており、この間に長さ約３ｍの横木が直交して渡されている。南北方向の角材に50cm前後の間隔でホゾ穴のある点は、これらが束柱を支える根太状の角材で、柵列・護岸施設等の基礎部分である



第４図　エレベーション

ことを示している。これら角材は二～三段に重なり合っているが、ホゾ穴が上・下でずれて束柱が貫通しないものもあるため、上段は後代の改修であろうと思われる。上段と下段の構築方法に変化が認められないので、時期的にはさほど隔たっていないことが考えられよう。また溝と直交方向の横木は、ホゾ穴を持つ角材とこれを支える直径約40cmの土丹塊を上に載せており、角材の沈下を防ぐためのものであったことが判る。

溝底面には柱穴・土壙・礎板等が認められる。礎板は4箇所にあり、互いに東西約1.5m（約5尺）南北約1.2m（4尺）を隔てた柱穴中に埋置されている。溝にかかった橋脚の基礎である可能性が考えられるが、上部構造は不明である。同様の可能性はP15・16・18・19等の落込みにも考えられよう。溝中の土壙4・5については、位置的にみて礎板との関わりを想像することもできるが、詳細は不明である。



第5図　溝対比図

第3章　出土遺物

1.　舶載陶磁器（第6図）

全部で10点出土した。内訳は龍泉窯系青磁7点（うち6点図示）、青白磁2点（うち1点図示）、高麗青磁1点である。

龍泉窯系青磁（1～6）

1—碗底部片。復元高台径3cm。胎土は灰色で、淡水青色の失透釉がかかっている。高台畳付は露胎である。体部は、欠失しているが細めの蓮弁文があると思われる。黒褐色粘質土上面から出土。

2—碗口縁～体部片。復元口径13.7cm。細手で単弁の鎬蓮弁文を外面に配する。胎土は灰白色で、釉薬は淡青緑色、半ば失透している。溝覆土中層から出土。

3—鉢口縁部片。内面に不明瞭な蓮弁文を持つ。復元口径19.8cm。胎土は灰色を呈し、釉薬は淡水青色で厚く、半ば失透している。溝中層から出土。

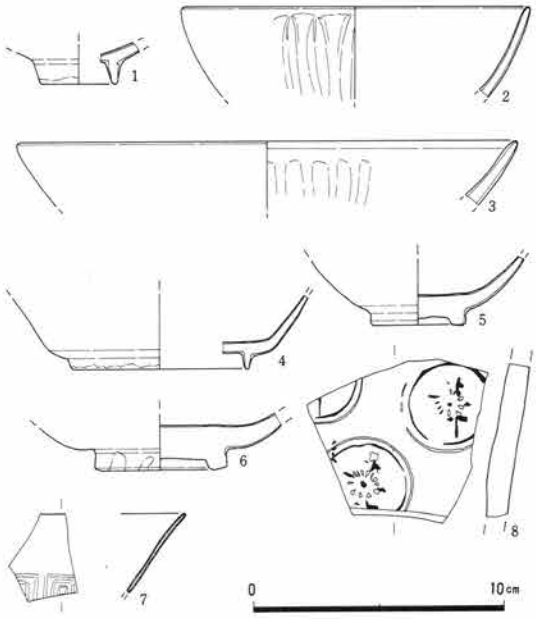
4—腰部が上方に折れる無文鉢の底部である。高台径7㎝。胎土は灰色であるが、高台部分は淡褐色を呈する。釉薬は淡水青色で、畳付のみ露胎である。溝下層から出土。

5—無文碗底部。高台径3.7㎝。胎土は灰色で堅緻、釉薬は青灰色透明である。高台内露胎。溝下層から出土。

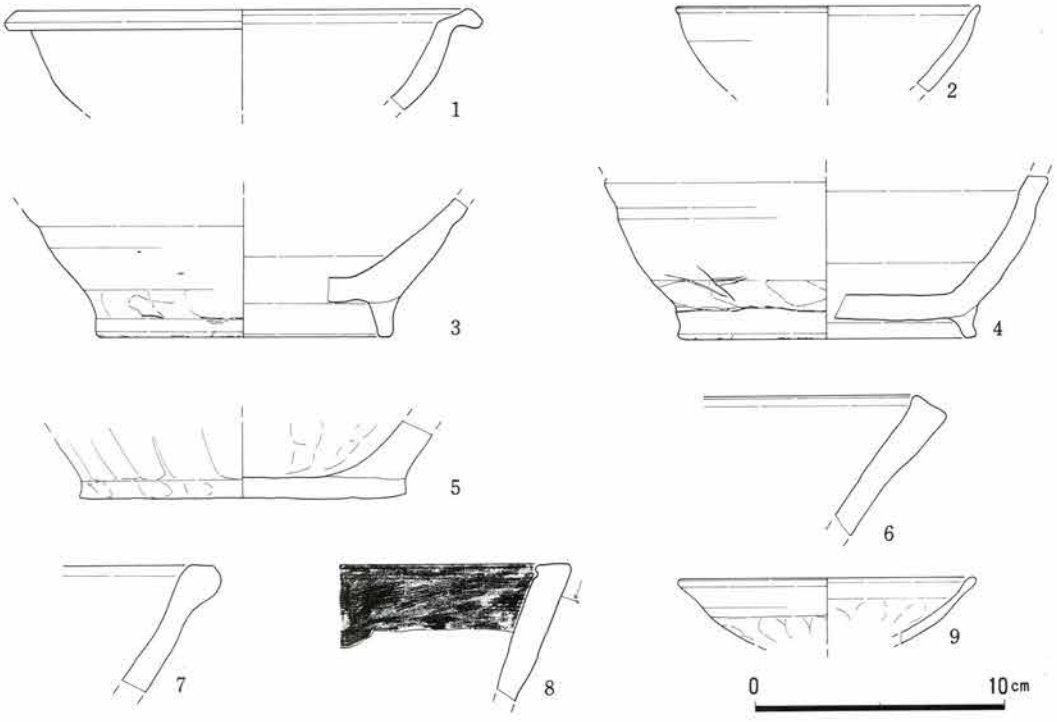
6—碗底部。復元高台径3.2㎝。劃花文系であると思われる。胎土は灰白～灰色を呈し堅緻で、釉薬は暗緑色透明である。高台内は露胎。溝下層から出土。

青白磁（7）

内面に型押しの雷文帯を持つ碗。胎土は乳白色で、釉薬は僅かに青味がかった透明釉である。表採品。



第6図　舶載陶磁器



第7図　国産陶器・土器質雑器

高麗青磁（8）

瓶子の胴下半部片であると思われる。白土と黒土の象嵌による二重の円圏を設け、圏内に花文を配している。胎土は灰色で堅緻、釉薬は淡青緑色で半透明である。溝下層から出土。

2．国産陶磁器（第7図1～6）

瀬戸・常滑・渥美・捏鉢・近世陶磁器などがあるが総量少なく、6点を図示するにとどめる。

瀬戸（1・2）

1―折腰鉢である。復元口径18cm。胎土は黄白色を呈し、気孔多くやや軟質、釉薬は黄褐色で、口縁部の剝落が著しい。溝中層より出土。

2―茶褐色の鉄釉のかかった、いわゆる天目形の碗である。復元口径12cm。胎土は淡褐色できめが粗い。北西拡張区上層から出土。

渥美（5）

甕底部片。復元底径13cm。胎土は灰～灰褐色を呈し、気孔は多いがきめは細かい。内底面には降灰が目立つ。溝中層から出土。

常滑（6）

捏鉢口縁部。胎土は灰黒色で、長石・砂粒などを多く含む。器表は褐色に焼けている。溝中層から出土。

山茶碗窯系捏鉢（3・4）

3―底部片。復元高台径11.6cm。内面は平滑で、よく使用されたことが判る。胎土は灰色で、堅緻に焼き締っている。地山黒褐色粘質土上面から出土。

4―これも底部片。復元高台径11.8cm。内面には降灰が認められる。胎土は灰色を呈し、夾雑物多くきめが粗い。溝下層から出土。

3．土器質雑器（第7図7～9）

手焙り（7・8）

7―口縁部が大きく肥厚して外反気味になる。胎土は、胎芯で灰黒色、器表近くで肌色を呈し、きめが粗い。溝中層から出土。

8―口縁部に黒漆を刷毛塗りしている。内面口縁直下に沈線が廻り、端部は面取りされて平坦である。これも胎芯は灰黒色で、器表近くで肌色を呈する。溝最下層から出土。

白かわらけ（9）

従来鎌倉で出土しているものとは胎土・形状ともやや異なっている。口縁部は肥厚して端部を丸く収める。胎土は石英などを多く含みきめが粗い。手捏ねの後、口縁部にナデを施す。復元口径11.8cm。溝中層から出土。

4．かわらけ（第8図）

大半が溝中から出土している。第8図は出土した層別にまとめたものであるが、掘り直しによる

攪乱を受けているためか、従来考えられていた共伴関係とは、いささか様相を異にしている。

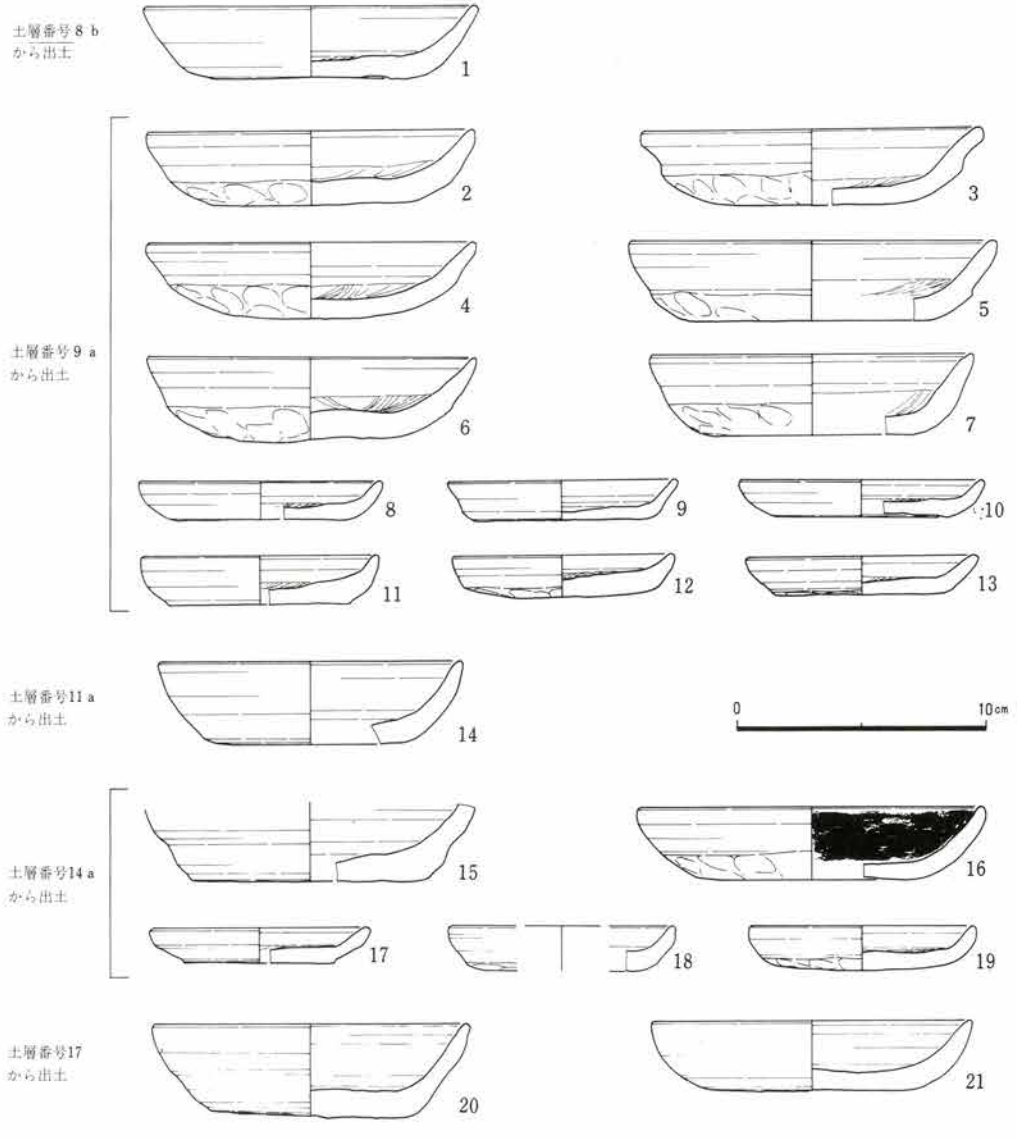
土層番号８ｂ出土のかわらけ（１）

体部はやや浅い角度で直線的に立上る。底部から口縁にかけて器肉が次第に薄くなり、丸い端部に到る。口径13cm、底径9.3cm、器高2.9cm。

土層番号９ａ出土のかわらけ（２～13）

このうち小型の８～11がロクロ成形で、他は手捏ね成形である。

手捏ね成形のものには、体部下半の稜の強いもの（３・５）と弱いもの（２・６・７）、両者の中



第８図　かわらけ

間的な様相のもの（４）とがあり、器肉の厚さは個体毎に異なっている。小型の手捏ね成形のものでは、全体に器肉が厚くて貧弱な器壁を持つもの（12）と全体に薄手のもの（13）とがある。

小型ロクロ成形のものは、概ね器高が低く、薄手で内彎気味の器壁を持つが、若干厚手のもの（11）や、外反気味のもの（９）も含まれている。

土層番号11ａ出土のかわらけ（14）

ロクロ成形のかわらけで、大型のうちでは口径12cmとやや小さめに属する。器肉は厚めで、器壁は内彎している

土層番号14ａ出土のかわらけ（15～19）

15・17がロクロ成形で、他の16・18・19が手捏ねによる成形である。

手捏ね成形のものは、大型・小型ともに体部下半の稜が殆どみられず、また全体に内彎気味の器壁を持つ。

ロクロ成形によるものでは、大型（15）では全体にぶ厚くがっしりとしてロクロ目が明瞭に残るものがあり、小型（17）は薄手で口縁部が肥厚して丸い端部を持つものがある。

土層番号17出土のかわらけ（20・21）

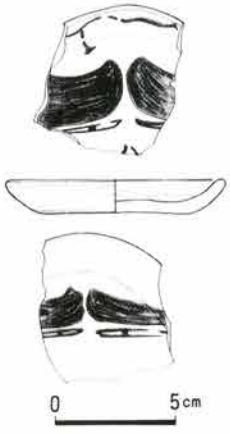
ロクロ成形による２点がある。20の方は器高が高く（3.8cm）、直線的な器壁を持つが、21は器高が低めで（2.8cm）、器壁が内彎している。

人面墨書かわらけ（第９図）

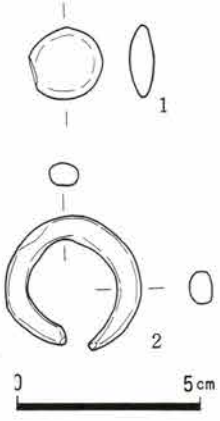
北西拡張区内の溝中から出土した。内外に戯画化された人面が描かれている。眉が異様に太く、目は対照的に細い。全体にしかめ面である印象を受ける。かわらけそのものは第８図８・10に以ている。

５．土製品（第10図１）

碁石らしきもの１点がある。指先でつまんで成形したらしく、表面に指紋を留める。かわらけ質であり、白黒いずれかは不明である。碁石以外のものである可能性もあろう。直径1.9cm、厚さ6mm。表採品。



第９図
人面墨書かわらけ



第10図
土・金属製品

６．金属製品（第10図２）

環状の銅製品が１点出土した。太さ６mm前後の銅の棒を曲げて造ったもので、両端の接合部分は剝離している。直径3.5cm。溝上層から出土。

７．石製品（第11図）

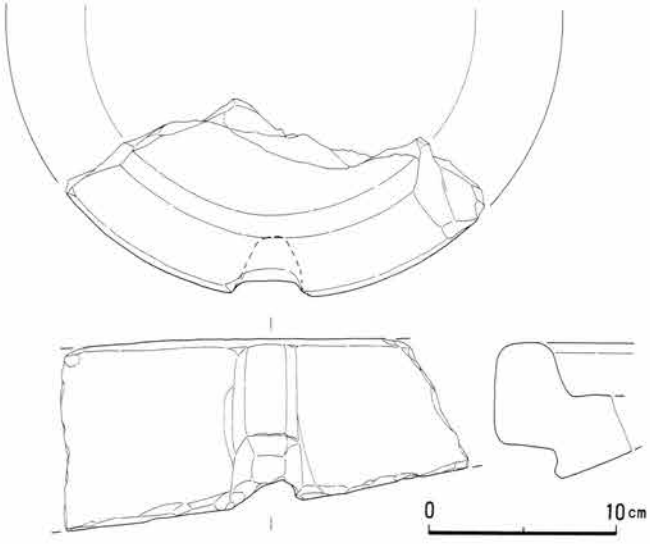
凝灰岩製の石臼が一点出土している。上臼の破片で、復元径29.5cmを測る。下臼と磨れ合う下側

の面は、使用によって斜めに磨り減っており、把手を差し込む穴の下側にまで達している。溝上層から出土

8．木製品（第12・13図）

すべて溝覆土からの出土である。大量に出土したが、大半が材木の切れ端などであって、形状などの窺えるものは一部に過ぎなかった。

1—鍋か釜の蓋であろう。14面体に面取りしたつまみが差し込まれている。復元径22cm。中層から出土。



第11図　石製品

2—しゃもじ状の製品。長さ20cm、最大幅4.8cm。下層から出土。

3—不明木製品。上部（あるいは下部か）を欠失している。断面は方形で、下方（上方？）に木釘が貫通している。現存長17.8cm、幅1.9cm。中層から出土。

4—これも不明製品である。手斧で削り込んで刻みを作っている。例えば横木の留め具のような溝構築材の一つであろうかと思われる。長さ21cm、幅9cm、厚さ4.4cm。中層から出土。

5・6—共に鍋・釜などの蓋の把手であろう。断面方形で、5には蓋本体に取り付けるためと思われる木皮の紐が残っている。5は長さ13cmで握りの部分は2cm角、6は長さ11.2cmで握り部分は2cm角である。5が中層から、6が下層から出土。

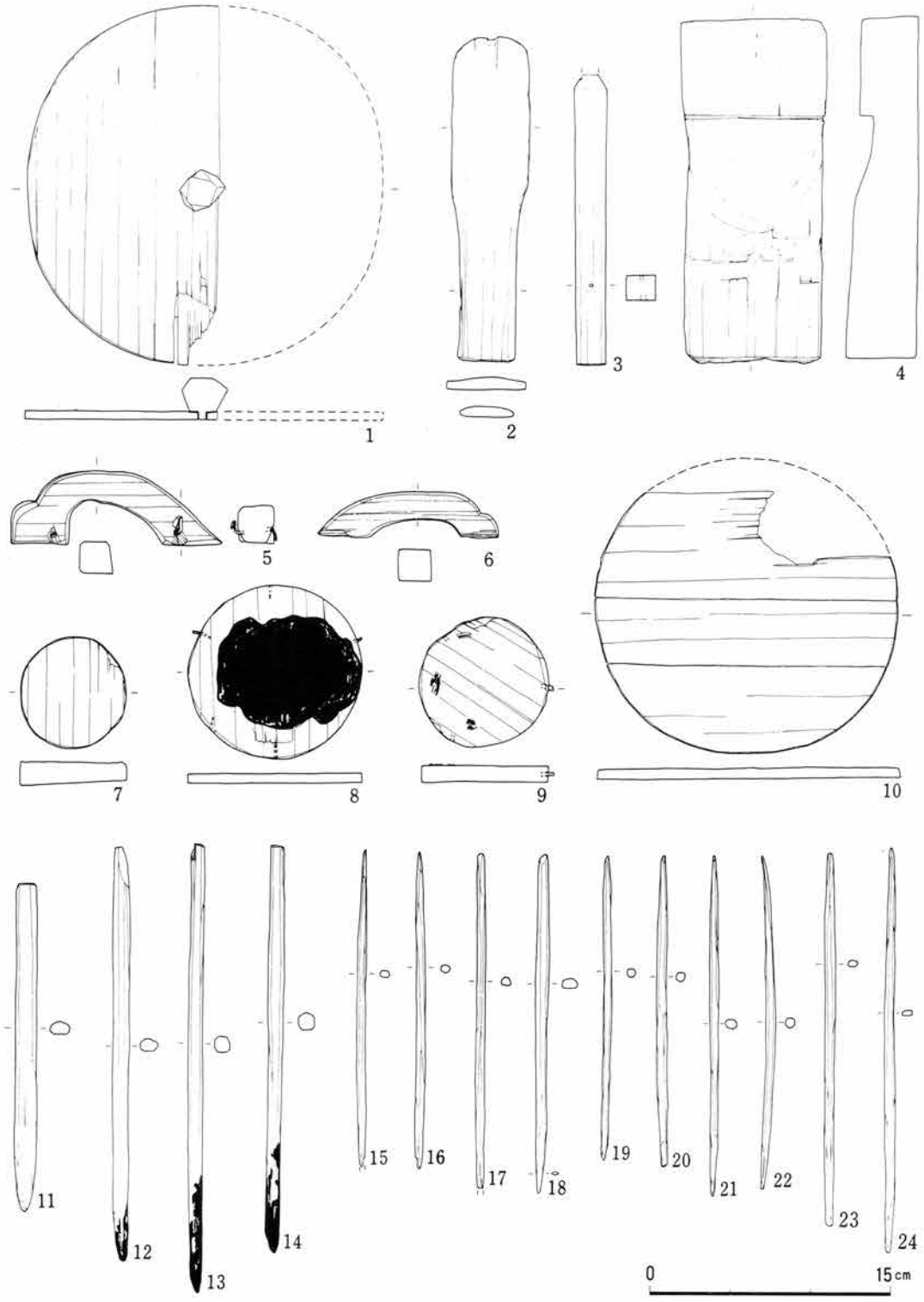
7～10—曲物底部であろう。8・9には器壁を打ち付けた木釘が遺存している。8は表面が焼け焦げており、9には植物質の付着物が認められる。7は直径6.7cm、厚さ1.3cm、8は直径10.8cm、厚さ6mm、9は直径9cm、厚さ1cm、10は直径18.8cm、厚さ6～7mmである。7・8・10が中層から、9が下層から出土。

11—ヘラ状に先端を薄く削ってある。長さ20.4cm、幅1.3cm、厚さ7mm。最下層から出土。

12～14—先端の焼け焦げた棒状の製品。さい箸のようなものか、あるいは火付け道具のようなものであろう。長さは番号順に25.5cm、27.7cm、25.2cm。12が下層から、13・14が最下層からの出土。

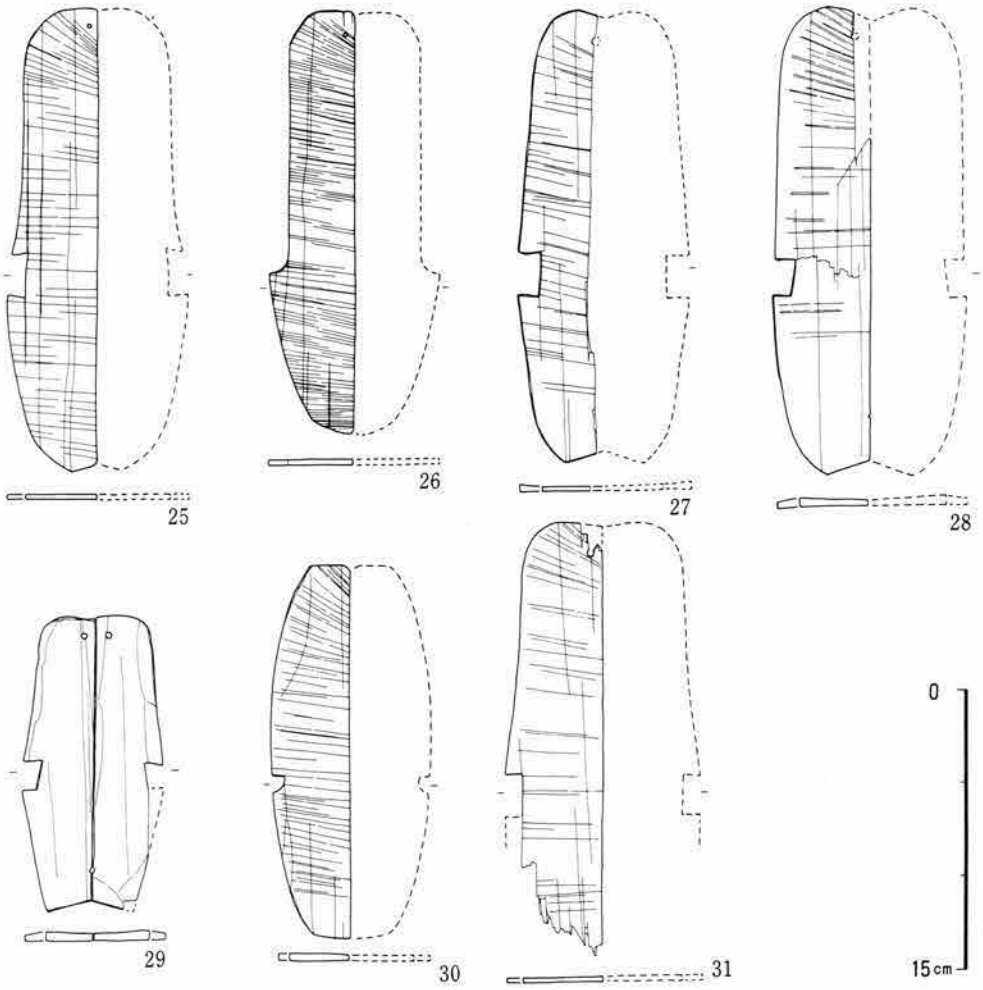
15～24—箸状木製品。長さは最長のもの（24）が25cm、最短のもの（19）が18.8cm。15～18が中層、19・20が下層、21～24が最下層からの出土。

25～31—板草履の芯である。大半にわらの圧痕が残っているが、29のみ木質が堅いためか圧痕が観察できない。様々の形状があるが、26は両横の紐を通す部分から上部の側縁を削ぎ落し、下半に



第12図　木製品

較べて上半が細くなっている。30は全体に楕円に近く、両横の穴も小さい。また29は子供用であると思われる。25—長さ24.6cm、復元幅9.7cm。26—長さ22cm、復元幅9.1cm。27—長さ24cm、復元幅9cm。28—長さ25cm、復元幅10.3cm。29—長さ15.8cm、復元幅7.6cm。30—長さ20cm、復元幅8.6cm。31—長さ23cm以上、復元幅10.5cm。25・26が中層から、27～30が下層から、31が最下層から出土。



第13図　木製品

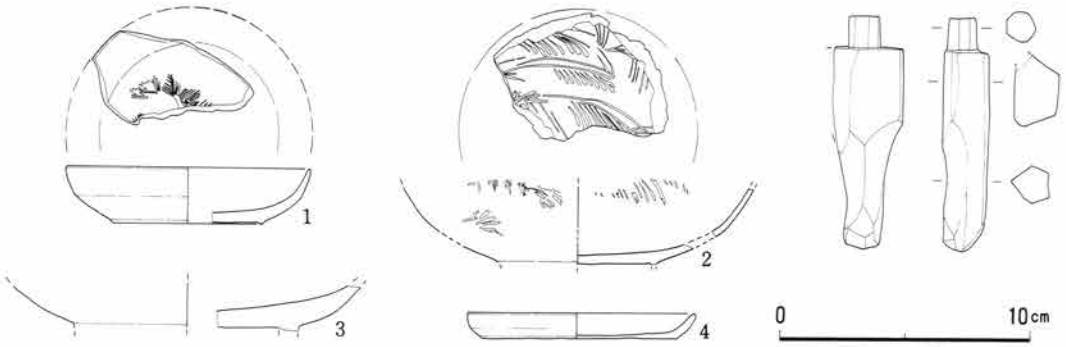
9．漆器類（第14図）

5点を掲載したが、他に椀・皿の細片4点がある。これもすべて溝中からの出土である。

1—深めの皿。他の黒漆の上から朱漆で内面に葉文らしき文様が描かれている。復元口径9.8cm復元高台径6cm、器高2.2cm。中層から出土。

2—椀体部および底部片。内外に草文が描かれている。復元高台径6.1cm。中層から出土。

3—黒漆のみの、無文鉢底部。復元底径8.9cm。中層から出土。



第14図　漆器類

4―無文の皿。口径9.1cm、底径7.8cm、器高1cm。北西拡張区から出土。

5―膳脚部であろう。差込み部分を除いた長さは8cm。差込み部分は長さ1.2cm、径1.3cm。北西拡張区から出土。

10．人骨

溝上層から頭蓋1点が出土した。偏平な径50～60cmの「かまくら石」が覆土中に斜めに入っており、この脇から出土したものであるが、埋葬されたような状況にはなく、付近に他の部位の骨も見当らないところから、上流から流れてきた可能性が考えられる。頭蓋そのものは、聖マリアンナ医科大森本岩太郎氏の御教示によれば、10歳位の少年男子のものである。

ま　と　め

今回の調査（以下、第2地点と称する）で確認した溝は、構築方法といい、位置といい、先に調査した雪ノ下一丁目371番―1地点(以下、第1地点と称する)のそれの続きであるのは明らかで、若宮大路と、その周辺の屋敷地とを区画する役割を有しているものと考えられる。第5図は二度の調査で確認した溝を対比させてみたものであるが、続き方の不明瞭なものもあるので、その点を指摘して今回の調査のまとめとしたい。

第5図の溝を東側からみていくと、まず地山黒褐色粘質土を東岸とする溝が見られる。二つの地点双方に認められるもので、位置からいって、続いているのは間違いなかろう。この西隣にある溝が、二つの地点ともホゾ穴のある角材を2～3段有するもので、同様の状況であり、これも続いているのはまず確実なところであるが、第1地点の該溝の西壁が二段であるのに対し、第2地点のそれは一段でしかない。さらに西側に目を移すと、地山の削り残された部分を挟んでもう一条溝があるが、東岸はともかく西岸の状況は第1・第2地点で異なっている。第2地点では北西の拡張区に、西に急傾斜で落ちる落込みを確認したが、これは第1地点では未確認のものである。

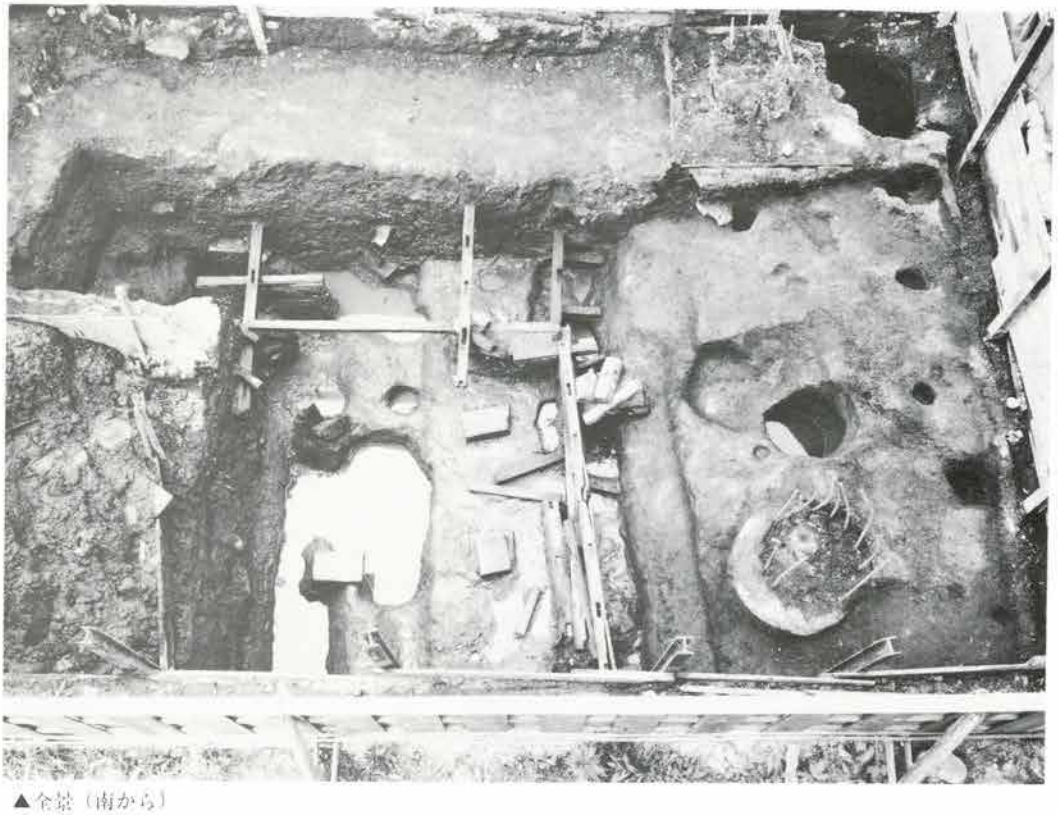
以上のような疑問点は残るが、いずれも第1・第2地点間の空白地域を調査すれば明らかにする

ことができるであろう。さらに、第３図土層番号15と16の、層位的に最も古い時期に属する二条の溝の年代差については、上層の切込み肩を後代の溝に削り取られているため、本調査で決定することはできなかった。この点は、溝の変遷と併せて、第１地点の調査報告を俟って考察を加えたい。

図版 1

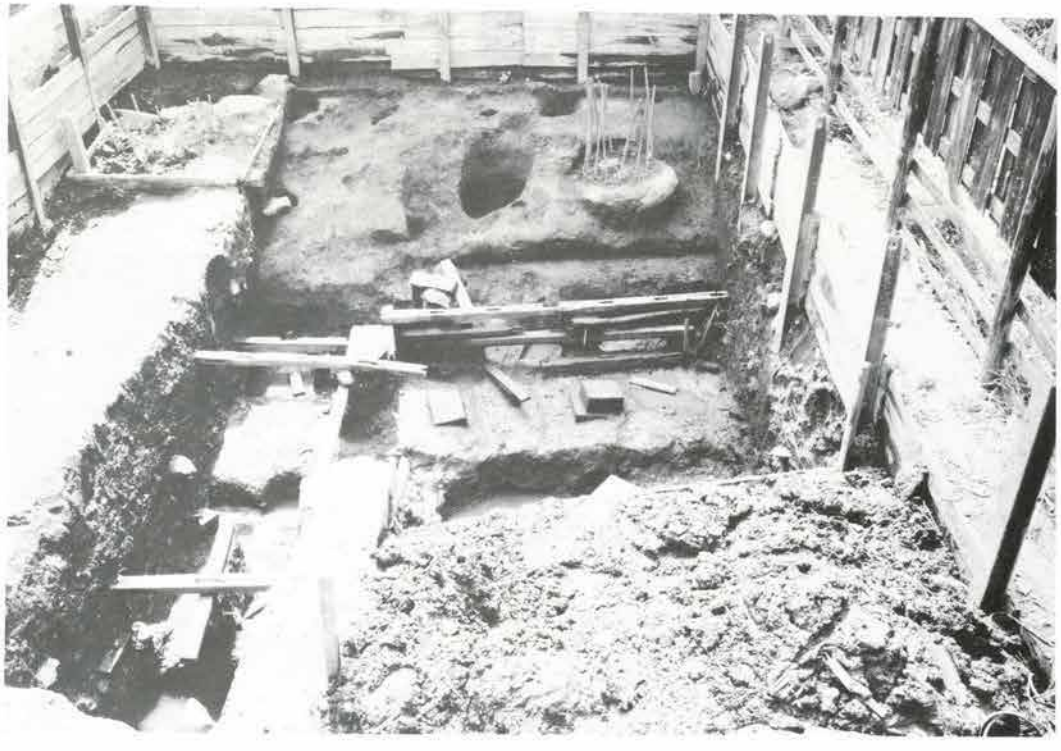
▲ 遺跡遠景（白い矢印が調査地点、左手奥が鶴岡八幡宮、中央の道路が若宮大路）

▼ 調査前近景（西側若宮大路から）



▲全景（南から）

▼同上（西から）



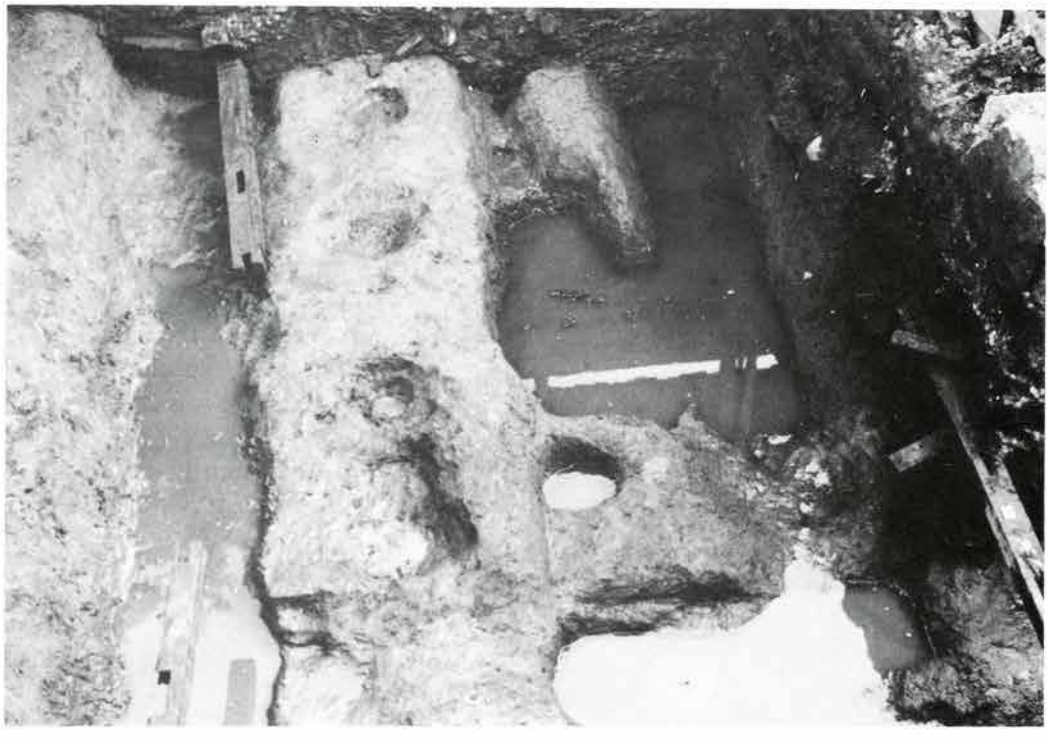
図版 3

◀　溝検出状況（南から）

▼　同　上（東から）

▲ 溝完掘後の状況（南から）

▼ 同　上（北から）



図版 5

▲土壙 1（右）・2（中央奥）・3（同手前）

▼頭骨出土状況

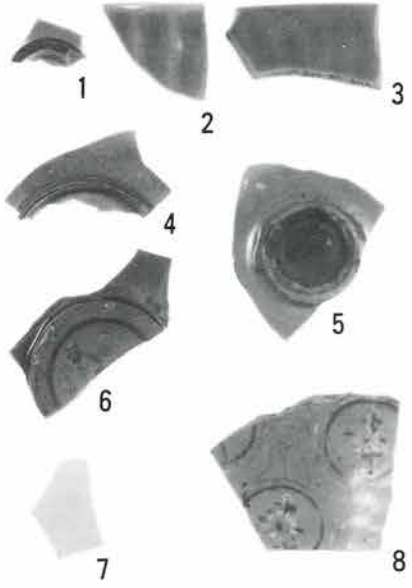
図版 6

◀ 溝中央部土層断面
（北西から）

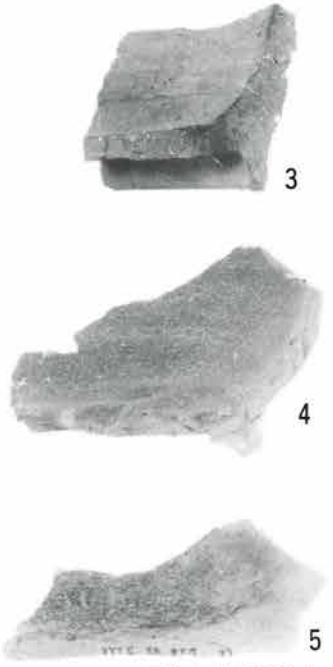
同　上 ▶
（北東から）

◀ 溝南壁土層断面

図版 7

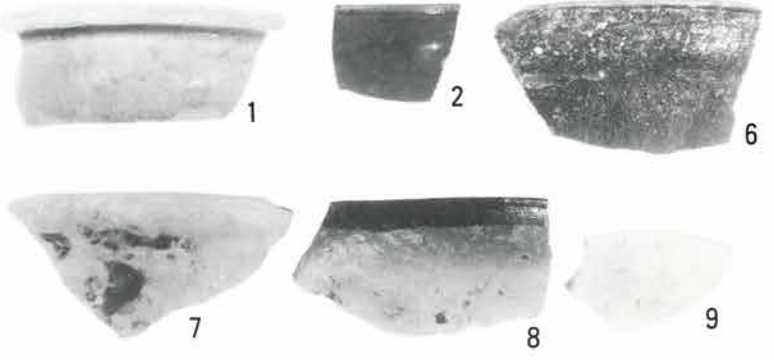


▲ 1. 舶載陶磁器（第6図）

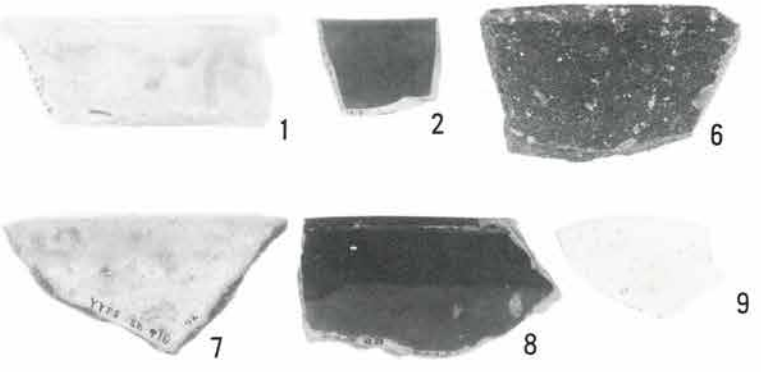


▲ 2. 国産陶器（第7図）

▶ 3. 国産陶器・土器―外面（第7図）



▶ 4. 同上―内面



2

6

10

11

20

21

▲ 1．かわらけ

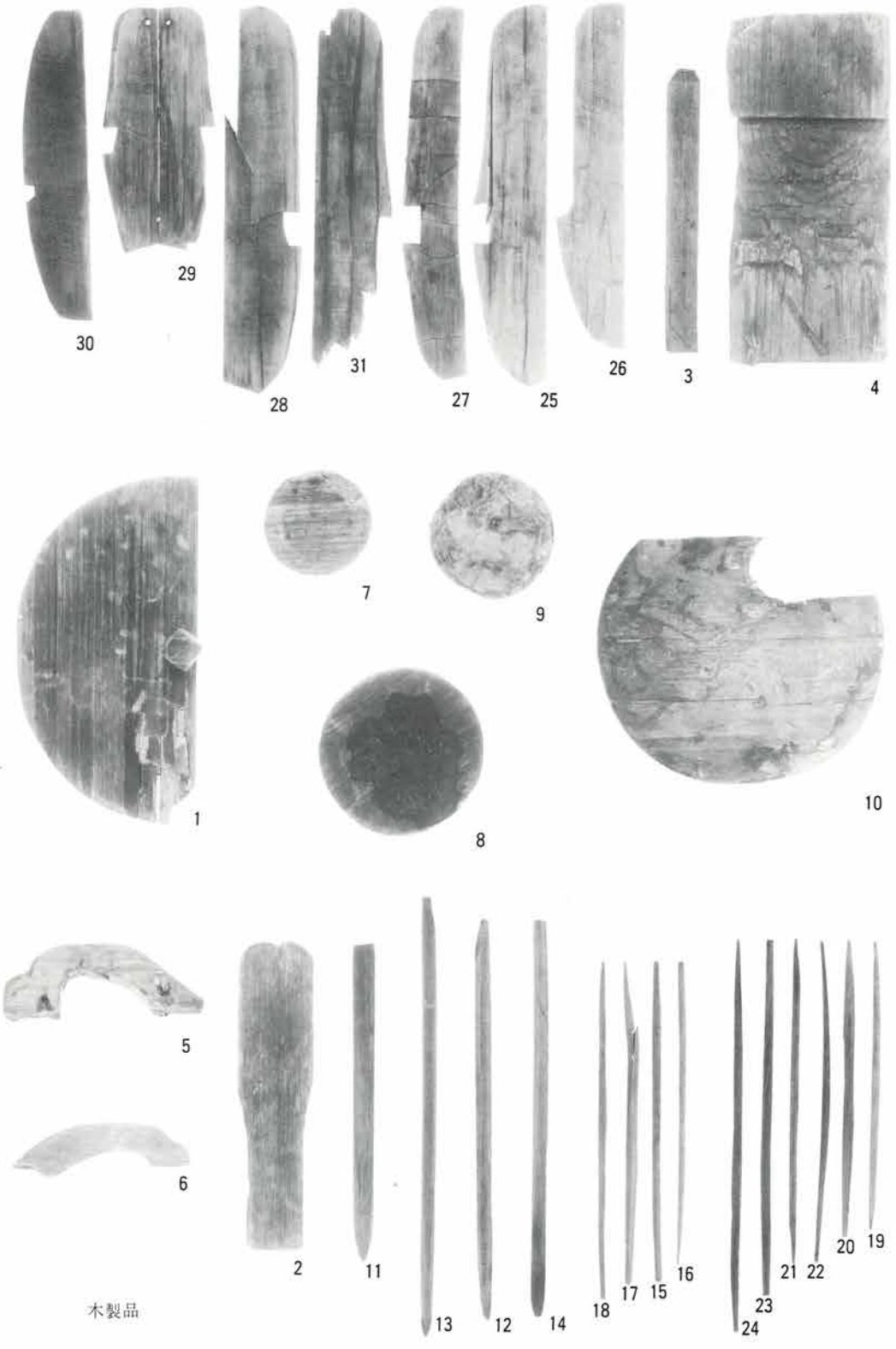
◀ 2．人面墨書かわらけ

▲ 3．土製品

▲ 4．金属製品

▶ 5．石製品（臼）

図版 9


30
29
28
31
27
25
26
3
4
1
7
9
8
10
5
6
2
11
13
12
14
18
17
15
16
24
23
21
22
20
19

木製品

1

2

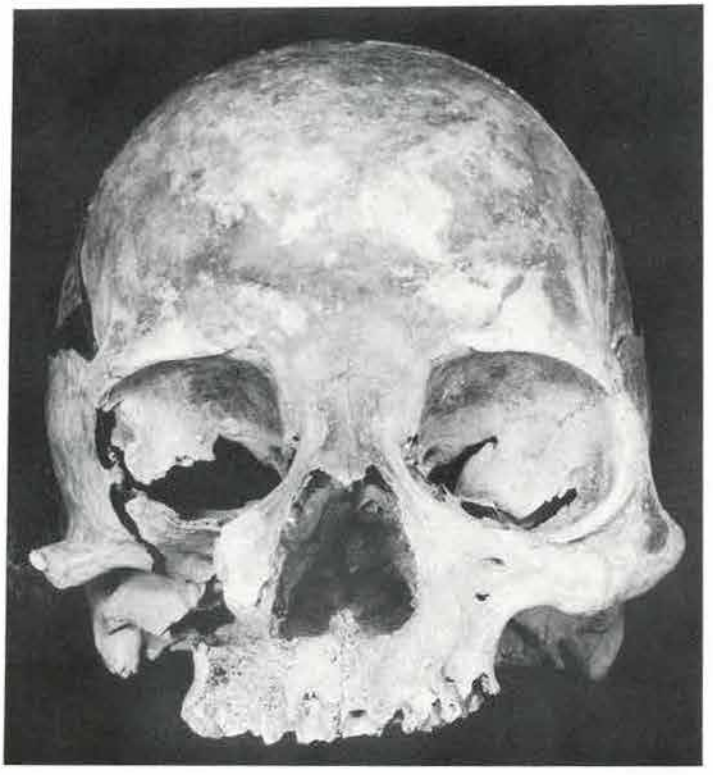
3

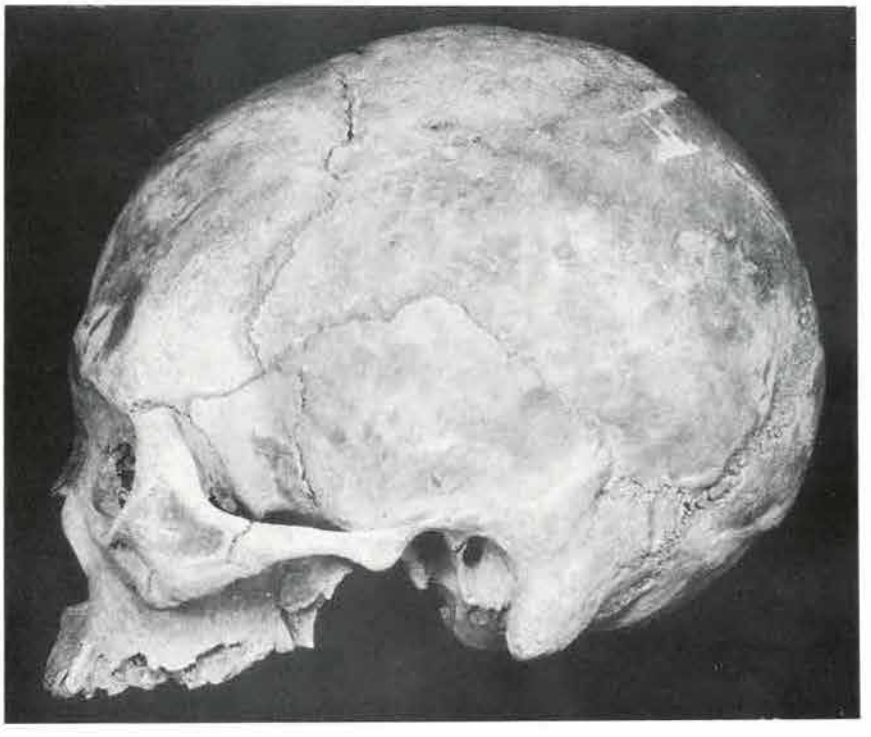
4

5

漆器類

図版 11





3．台　山　遺　跡

例　言

1.　本書は鎌倉市山ノ内字藤源治874番2に位置する台山遺跡発掘調査報告書である。

2.　調査は鎌倉市の委託を受けて台山遺跡発掘調査団（団長・赤星直忠）が実施した。

実施に際しては鎌倉市教育委員会の指導と助言を受けた。

3.　調査団編成及び調査参加者名は本頁下段に示した。

4.　本書の執筆は調査団長の指示に基づき下記の２名が分担執筆した。

斉木秀雄　第１章～第３章、第４章４、まとめ

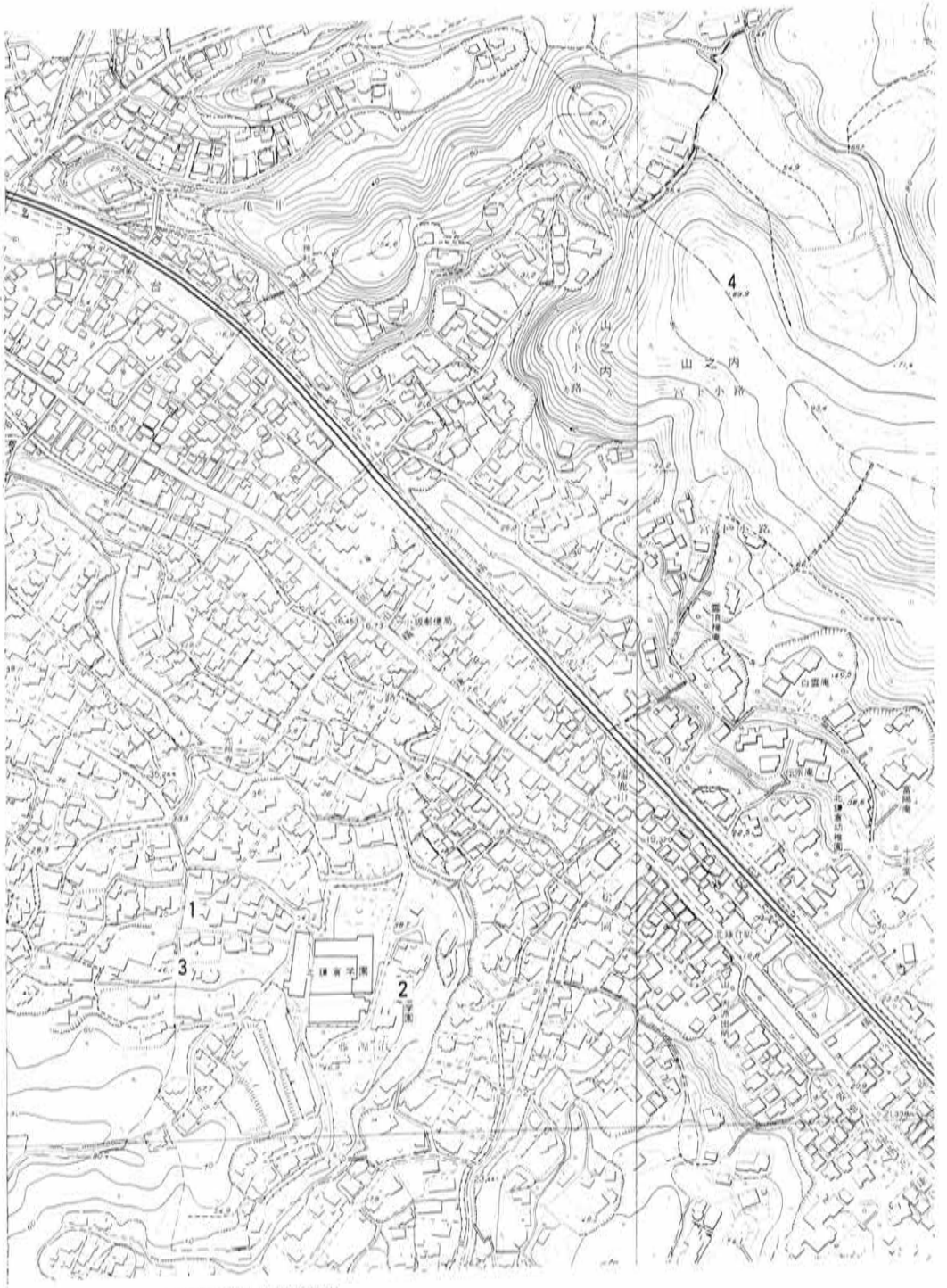
宗臺秀明　第４章１～３

又、報告書作成には執筆分担者の他に大河内勉、武淳一、渡辺知子らがあたった。

5.　本書に使用した写真は斉木秀雄、大河内勉が撮影した。

調査団編成

団長	赤星直忠
主任調査員	斉木秀雄
調査員	宗臺秀明、大河内勉
調査補助員	武　淳一、渡辺知子、田中園子



1．遺跡地　2．台山藤源治跡（北鎌倉女学園）
3．三上氏調査地点　4．宮ノ前遺跡

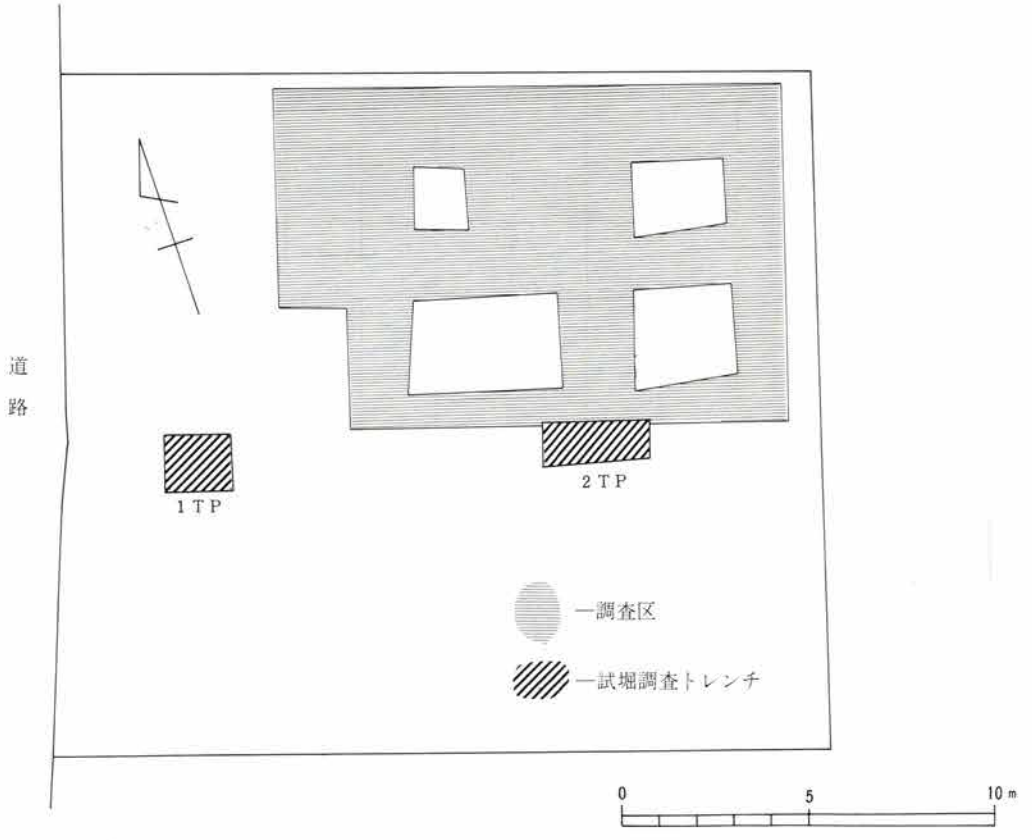
第1図　遺跡位置図

第１章　遺跡の位置及び歴史的環境

遺跡地は国鉄北鎌倉駅北西方、鎌倉市山ノ内字藤源治874に位置する。この丘陵上一帯は通称「台山」と呼ばれ、古くから弥生時代～近世の遺物散布地として知られている。鎌倉市史・考古編では台山に３ヶ所の遺物散布地を記している。１ヶ所は本遺跡地の存る丘陵が北に舌状に張り出した先端部、２ヶ所目はそれのやや南側、３ヶ所目はそのさらに南、丘陵を東西に横切る道路の南側一帯すなわち本遺跡の位置する地域である。市史ではそれぞれ弥生時代・宮ノ台期、弥生時代・久ヶ原期、土器片（土師器及び須恵器）散布としている。

このように台地上及びその周辺部も含めて考古学的環境に恵まれていながら発掘調査はほとんど行なわれていない。わずかに三上次男氏を団長とする調査団が昭和45年実施した調査(註１)と手塚直樹氏を団長とする調査団の実施した調査(註２)の２例だけである。それぞれの調査は北側斜面、南側斜面とに離れているものの同一丘陵の同一集落と考えられる。

三上次男氏の行った調査地点は本遺跡南約50ｍに位置し、約80㎡と調査面積が少ない割に、３軒の住居址（１軒は鬼高期、１軒は弥生町期もう１軒は遺物はないものの形状から住居址としている）



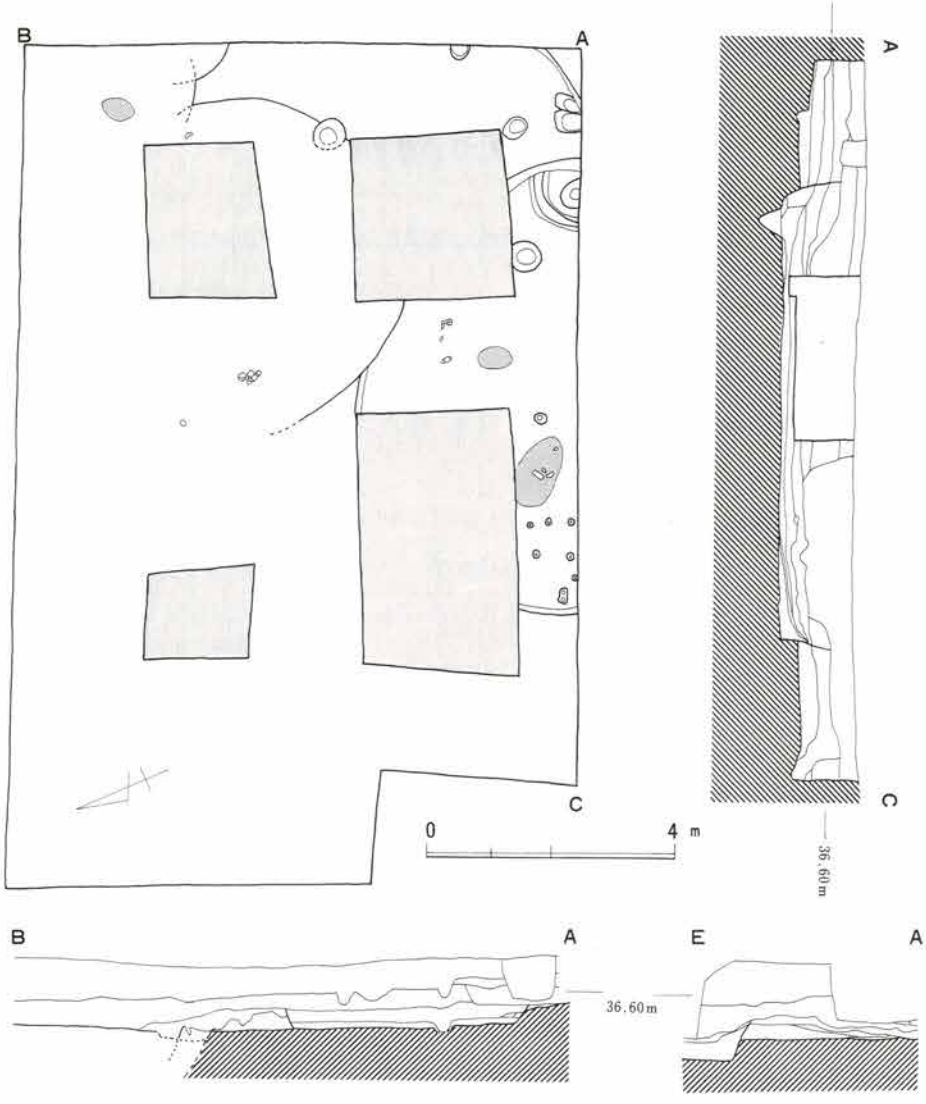
第２図　調査区及び試掘トレンチ位置図

が検出されている。又、採集品であるが中世のかわらけも３点出土している。

周辺の中世遺跡では円覚寺境内（明香池、続灯庵）、建長寺境内、岡本理髪店用地内など多くの遺跡の発掘調査がなされており、鎌倉の旧市街地内の発掘調査に比較して速度は遅いが、鎌倉市街地をとりまく周辺部の、古代から中世にかけての鎌倉の様相が明らかにされつつある。

第２章　調査の経過及び堆積土層

調査は個人住宅建設にともなう埋蔵文化財発掘調査として昭和59年10月13日～同年10月24日までの間に実施した。



第３図　遺構全測図及び堆積土層

調査に先立っては、鎌倉市教育委員会文化財保護課が２ヶ所にトレンチを設定し試掘調査を行った。その結果、住居址の存在を確認したため、赤星直忠を団長とする台山遺跡発掘調査団に当該遺跡の発掘調査が委託された。

調査区は建築建物の基礎コンクリートのための根切り部分とし、又、調査深度は遺跡地西の道路面を基準に地表下110cmまでとし、表土（50～80cm）は機械により除去した。

堆積土層は４層に分けられた。(上から)第１層は表土で現代の盛土及び攪乱土層、第２層は暗黄褐色を呈し粘性が強い、第３層はソフトローム、第４層はハードロームである。遺構は第３層上面で検出したが、土層堆積を観察すると第２層上面からの掘り込みである。

第２層以下の堆積は、急角度で北に向って傾斜している。三上氏の調査地点で検出されたような東から西への傾斜は確認できなかった。

第３章　検出遺構

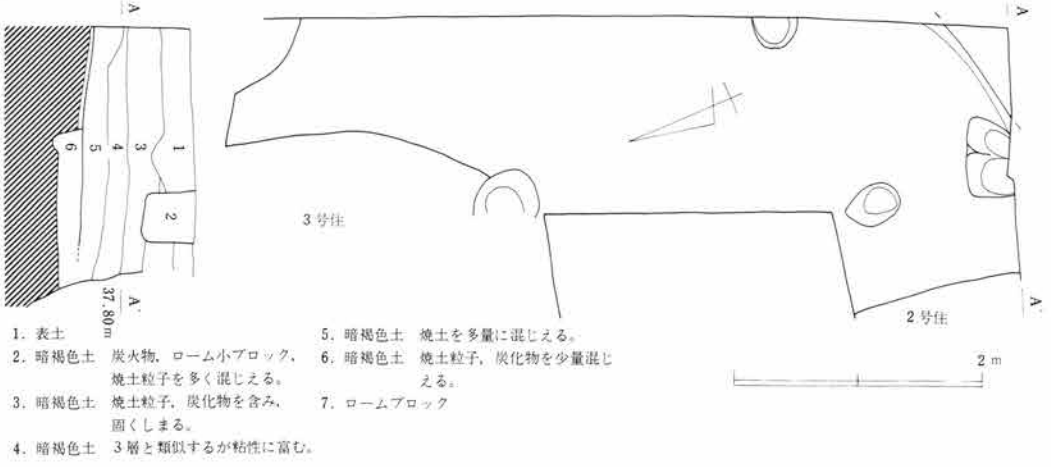
調査深度等の規制もあり、６戸の竪穴住居址を確認したが、２戸を調査、１戸を部分的な調査するにとどまった。

1.　１号住居址

調査区南西隅で検出された住居址である。東、北、西の調査区外に延びるため全体の４分の１程度の調査である。平面形は円形であるが規模不明。壁の掘り込みはやや傾斜を持ち、壁高20cmを測る。壁溝は存在しない。

床面は堅く良好。炉址は検出されなかった。住居址床面上からは５口の柱穴が検出されたが規則性は認められなかった。それぞれ30～50cmの径を持つ円形の柱穴で深さは20～60cmである。

住居址覆土をみると、５層下部に軟弱な貼り床状の面があり、別の住居址の存在が考えられる。



第４図　１号住居址

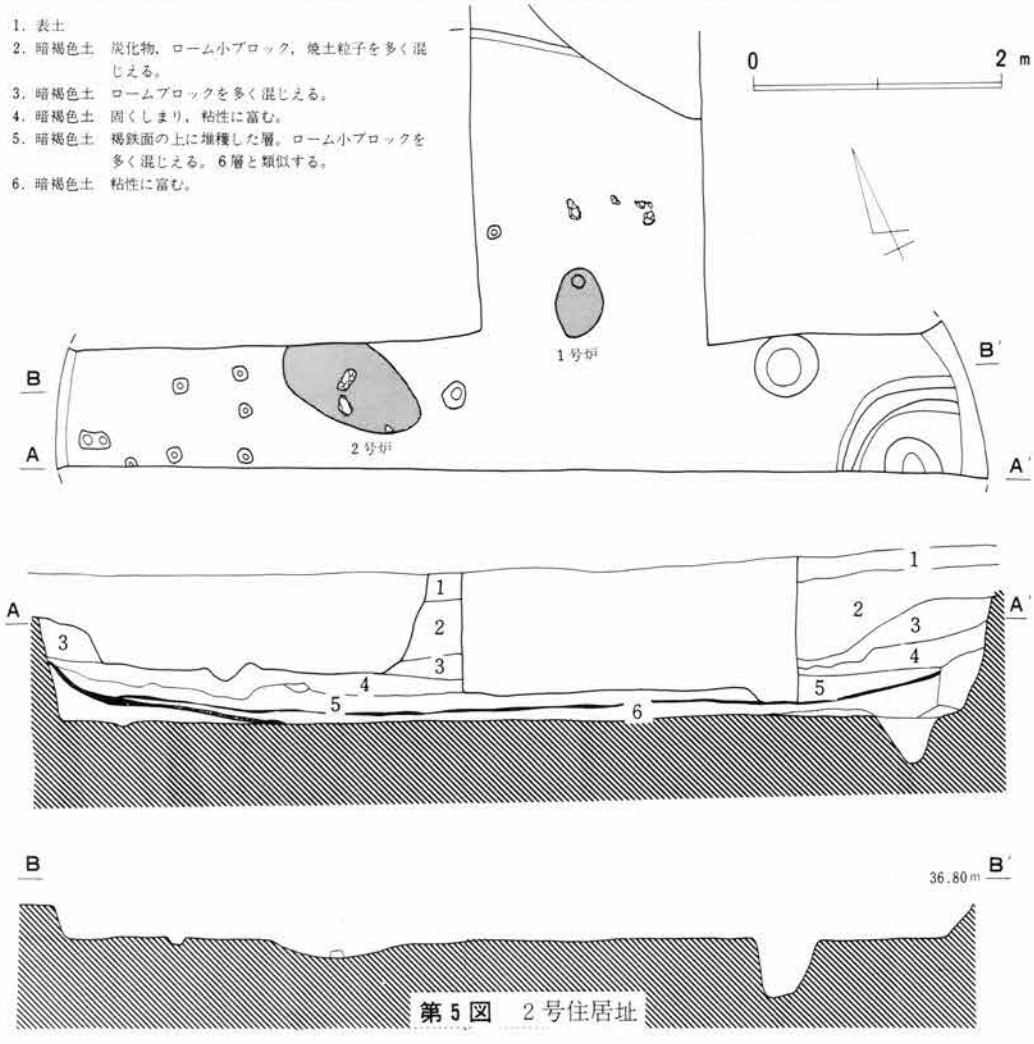
2.　2号住居址

1号住居址西で検出された。1号住居址を切って構築されている。南側調査区へほとんどが延びるため全体の5分の2程度の調査である。調査区内長軸(東西)7.5m、南北3.5m以上を測り、平面小判形を呈していたものと思われる。壁の掘り込みはほぼ垂直、壁高90cmを測る。壁溝は存在しない。床面は堅く良好、炉址は2基検出された。

1号炉は長軸57cm、短軸38cm、深さ3～5cmを測る。炭化物、灰の堆積は極く薄く、炉床もほとんど焼けていない。

2号炉は1号炉南西1.5mに位置し、長軸1.2m、短軸75cm、深さ15cmを測る。炭化物、灰はやや厚く堆積しており、炉床はロームが3～5cmほどボロボロになり、よく焼けている。又、炉内ほぼ中央には細長い泥岩塊がみられた。

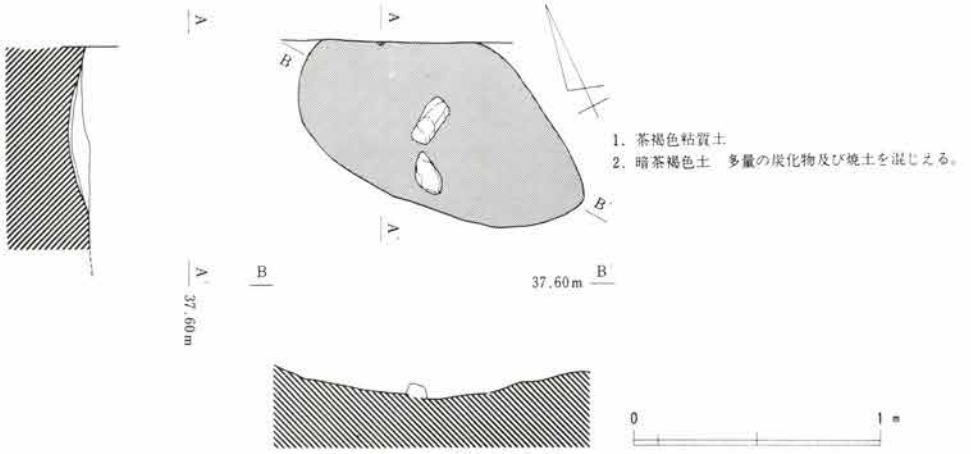
住居址覆土は自然堆積を示しているが、下部の5層と6層の間には鉄分が固まった、床面と間違うほどの面が在る。床面上からは大小12号の柱穴・土壙が検出された。主柱穴は1号炉南東1.5m で



第5図　2号住居址

検出された柱穴と考えられる。径50cm、深さ50cmを測る。

小柱穴は２号炉と、住居址西壁との間に集中している。各柱穴は径12～15cmの円形ないし方形を呈し深さ７～10cmを側る。炉周辺の構築物と考えられる。



第６図　２号住居址炉

3.　その他の住居址

３号住居址は部分的に調査（壁高・床の状態）を行ったものの４～６号住居址は平面形の一部の把握にとどまった。

３号住居址は壁高50cm、床面は高く、壁溝はない。覆土上部からは須恵器片が出土しているが、３号住居址の北部分には焼土の散乱状況等から時代の新しい住居址の存在も考えられる。

第４章　出土遺物

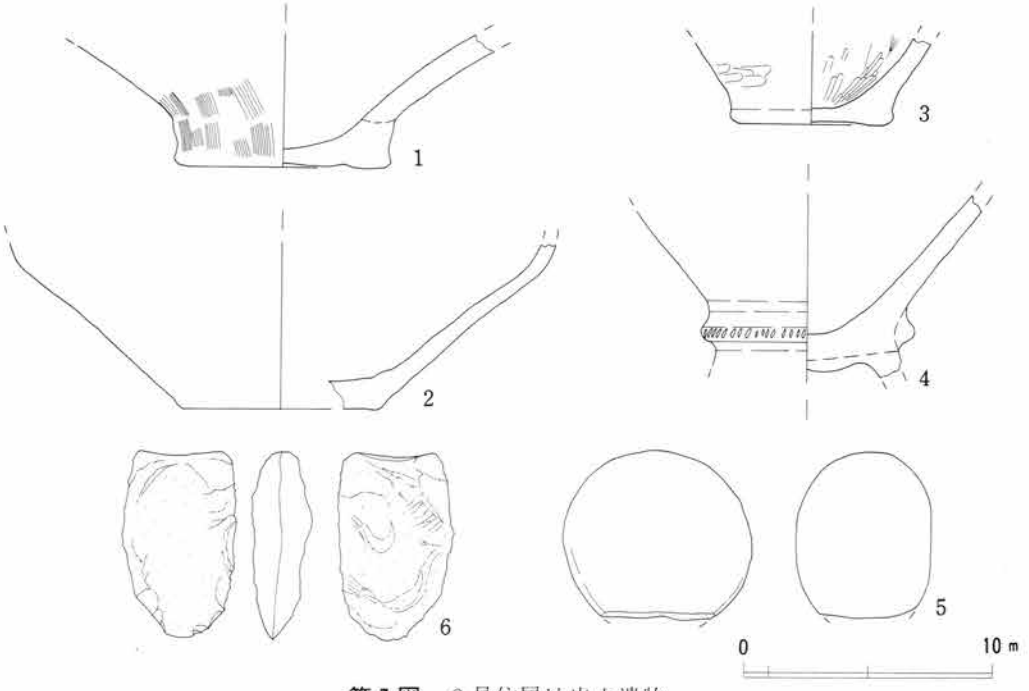
1.　２号住居址出土遺物（第７図）

大型住居の割に調査対称面積が狭かったためか出土した遺物は少なく、小片が多い。

１～３は壺の底部片。１は底径8.5cmを測る。白色と黒色の砂粒を含み、鈍黄色を呈し、焼成は良好で良く焼きしまるものの、器肉が厚くぼってりとする。底部は台状に張り出し、側壁は底部脇より強く外反する。刷毛による最終調整は粗雑で、底部脇接合部には指頭の押さえが残る。底面には木葉痕を残すが不明瞭。

２は底径８cmを測る。白色の小石粒を多く混じえ、内面黒色、外面赤褐色に焼け上がる。焼成は良好で器肉も薄い。内外面共に箆によるナデもしくはミガキが行られるが、褐鉄の付着がひどい。外面には赤彩が施される。胴部の立ち上がりは低く、最大径が低位に位置する。

3は底径6.5cmを測る。黒色砂粒を多く混じえるザラっとした土で赤色を呈する。焼成は良好で良くしまる。底部脇は台状に張り、底部外周がやや高まっている。内外面共に箆ナデがなされ、外面には赤彩が施される。



第7図　2号住居址出土遺物

4は台付甕である。くびれ部の径は突帯部を含めて8.6cmを測る。白色の小石粒を多く混じえる粉質土で黄灰色を呈し、焼成は良好である。胴部は真直ぐに立ち上がる。胴部の内外面はやはり粗いミガキ状の箆調整が行われ、突帯の接合部は箆の押えがなされている。突帯には不規則な刻みが入る。

5は細粒黒灰色凝灰岩の磨石である。現存で、7.5×6.8×5.3cmを測る。図上の底面は平担になっている。6は粗粒凝灰岩の打製石斧。7.5×4.5×2.5cmを測る。褐鉄面上より出土し、かなり水磨しており、調整打痕などは不明瞭である。流れ込みと考えられる。

この他、床面より検出された土器片（図版3）は図示できなかったが、胴から肩にかけての破片は弥生後期前半と思われ、住居址の形状もそれを追認させる。この事はここで取り挙げた遺物の中にも流れ込みを考えさせるものもあるが、所謂弥生町式の盛行を見ない南武蔵及び三浦半島の状況を表わしているともされようか。ともあれ、弥生後期として当遺跡周辺に多くの住居址が存在することを示すものであろう。

2.　3号住居址出土遺物（第8図）

3号住居址は完掘せず輪郭を出したに留めたため、多時期にわたる多くの遺物が出土している。久ヶ原期から前野町期併行までの弥生式土器、7世紀後半から8世紀前半代の土師・須恵器などである。

1は口径18.8cmを測る台付甕である。黒色・白色の砂粒を多く混じえるザラついた土で鈍黄色を呈する。焼成はややあまく、つくりも全体にぼってりとしている。胴部はあまり強く張らず、口縁

直下で外へ開く。口唇の指頭押捺は外から行われ、外面側の窪みは小さくなる。整形はヨコナデによってなされるが、屈曲する頸部外面には箆の押さえ痕が残る。

2は口径18cm、頸部径8.6cmを測る壺である。石英小石粒を多く混じえるザックリした淡紅色を呈し、良く焼きしまる。口縁下の屈曲は強く水平に近くなり、口唇端は下方に下がり角張る。頸部から口縁にかけての内外面は刷毛調整がなされ、肩には沈線によって画された羽状縄文が施される。

3・4は高杯の坏部である。

3は口径16.5cmを測る。白色微砂を混じえるやや粗い土。赤褐色を呈し、良くしまる。内面は黒色に炭素の吸着が見られるが、その表層が剥離する傾向が強い。口唇は外方へ斜めに削り取られ、角張り、また肥厚する。

4は口径16cmを測る。坏部の浅いものである。黒色の小石粒を多く混じえる粘質土で、橙色味の褐色を呈する。焼成はややあまい。薄手の作りである。口唇は丸く、体部は平担な坏底部より稜をなして外へ大きく広がる。箆のミガキは全面に及び、坏部はヨコナデの後に、脚部は箆削りの後になされる。

5は台付甕の脚台である。脚台径は9.6cmを測る。白色の小石粒を多く混じえるザラついた土で、鈍黄色を呈する。器肉は非常に厚く、ぼってりとしている。脚台は内傾気味に開き、端部は平担に削られている。貼り付けの突帯は幅広く厚いけれども、器体との高底差はあまりなく、体部ともそのまま連続するような割れ口を示し、器体と一体化してしまっているようである。脚台外面は指頭ナデ、内面は箆ナデ整形による。

6～8は土師器である。

6、7はそれぞれ口径9.8cm、11cmを測る壺で、黒色の小石粒を多く混じえたザラつく土である。口頸部はヨコナデ、頸部から胴部は箆のナデ上げによる。7は口唇が尖る。8は丸底の坏で、口径11.6cmを測る。淡紅色で非常に良くしまっている。口縁部は強いヨコナデによって外面に段を作り、口唇は尖り気味となる。体部外面は箆削りによる整形と思われるが不明瞭である。8世紀の第1四半紀と考えられる。

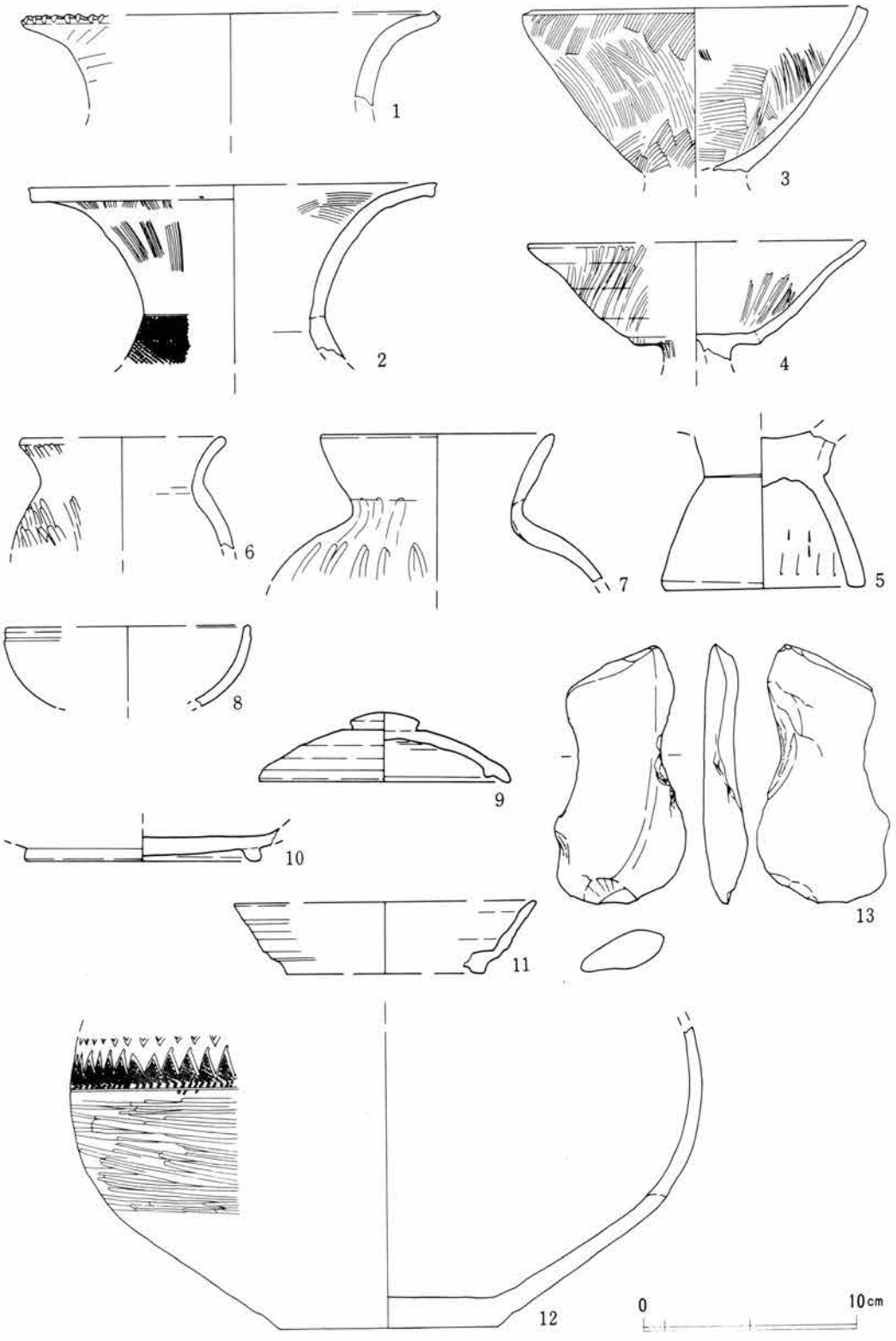
9～11は須恵器の坏と坏蓋である。

9は坏蓋で口径12cm、器高3.25cmを測る。全体に丸味を持ち、貼り付けのつまみ部はずんぐりとし、その基部径も大きい。天井部全体も偏平となり、身受けかえり部は小さく、そして内側によっている。外面には緑灰色の自然釉降灰か部分的にかかり、吹きあがっている。

10は高台径11.2cmを測る。付け高台は外へ開き、丸い感じを与える。

11は高台径9.4cm、口径14.2cm、器高3.4cmを測る。回転箆削り出しの底部は断面方形の高台を持ち、体部は鋭角的に外へ開く。高台から見込みまでの高さの割に体部が浅い。

12は弥生後期前半頃の壺である。底径10.2cm、最大径29.8cmを測る。雲母を多く混じえる、淡黄色を呈し、焼成はややあまい。底部より外反気味に大きく開き、最大径を比較的低く持ち、胴上部から肩にかけて施文されると思われる。沈線に画された施文帯内に、上下に互い違に向き会って刻



第8図　3号住居址出土遺物

される山形文の中に羽状縄文がある。体部外面は横方向の篦ミガキがなされ、赤彩されている。

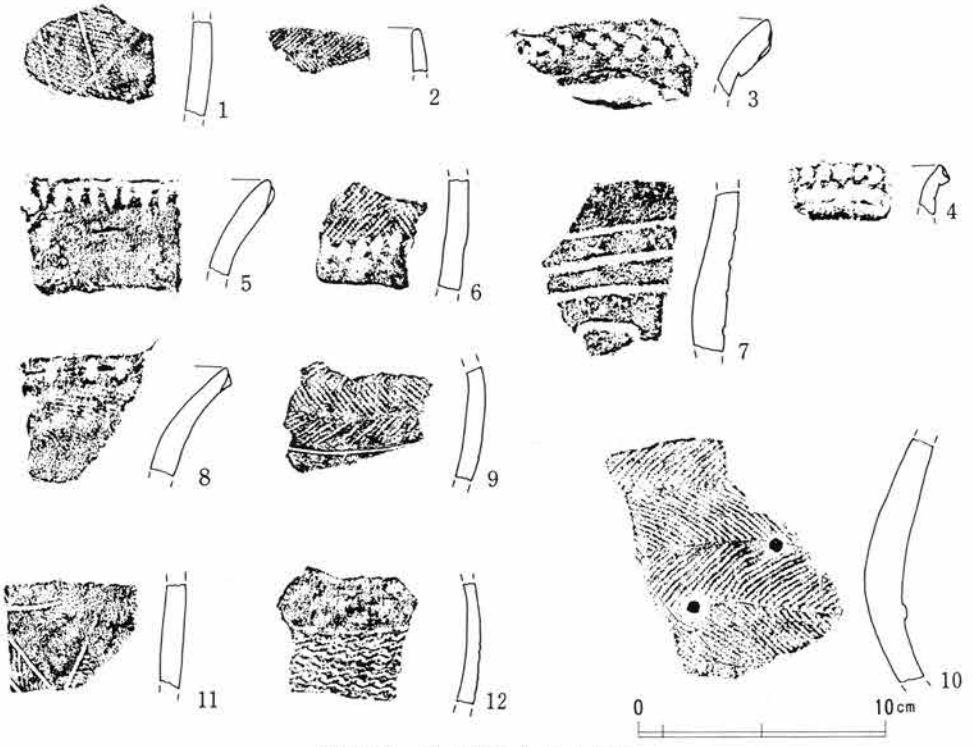
13は分銅型の打製石斧である。材質は黒色の硬質砂岩のため、調整打痕はほとんど残っていない。ただ、刃部先端に使用による刃こぼれ状の窪みが見られる。全長12.2cm、最大幅6.2cmを測る。厚みは一定でなく、一方に片寄っている。柄の装着のためとも考えられる。

3. その他の主な土器片（第9図）

1、2は1号住居出土。1は壺の胴部片。縄文帯地に菱形もしくは連続山形文の沈線。2は羽状縄文の施された壺口縁。

3～7は2号住居出土。3、4は共に口縁の折り返えしに交互押捺が行われた甕の口縁である。4は口辺部に粘土帯を数段もつ久ヶ原期以降の甕。5も甕の口縁部であるが、これは口唇に刻みが入り、縦位の刷毛目を体部に有する。6は壺の口縁部。羽状縄文を付された折り返えし口縁の下端に刻みを入れる。7は縄文土器である。縄文地に太い沈線の走るものと思われるが、縄文は不明瞭となっている。

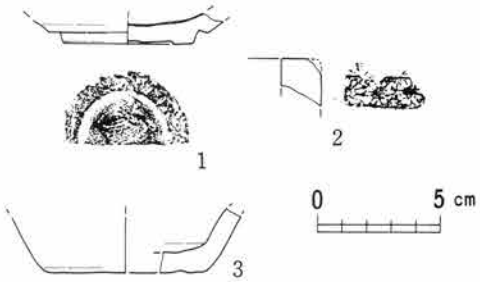
8～12は3号住居出土。8は甕の口縁部。口唇に刻みが入り、横位の刷毛目を体部に残している。9～12は壺の頸部もしくは胴部片である。9は沈線に画された羽状縄文で、文様帯外は赤彩されている。10は肩から頸部にかけて交互の方向に連接縄文が付され、その一段一段の境い目にボタン状突起の貼付がされる。11は縄文が2本の山形文に画される。13はS字状連節文だけが施されてる。



第9図　その他の主な土器片

4. 中世の遺物（第10図）

遺構は検出されなかったものの中世の遺物が約20点出土した。出土したのは瀬戸、常滑、手焙り、かわらけなどであるが、そのほとんどは小片であり図示あるいは拓影のとれたものは図版の３点にすぎない。



第10図　中世遺物

１は碗と思われる。幅広く低い削り出し高台をもつ。高台径5.3cmを測る。胎土は淡黄色を呈しやや粗く、ざっくりとしている。内面には淡黄緑色の釉がかけられているが、残存する外面には釉が認められない。瀬戸窯の製品である。

２は瓦質研磨手焙りである。口径復元不可能。胎土はピンクがかった淡褐色を呈し、粗いが焼き締っている。器面は口唇天部から外面が黒色、内面は淡褐色を呈する。外面口縁直下には浅く細い沈線で区画された横位の文様帯があり、その内側には径1.3cm、12弁の菊花スタンプが密に捺されている。口縁断面は四角形、側壁は直立していたものと思われる。

３はかわらけである。胎土は細く、粉っぽい。口縁部を欠くため断面形が十分に把握できないが、残存部からみると口縁部は胴部中位からやや強く外反するようである。外底面には回転糸切り痕が残る。復元底径6.5cm。側面観、胎土は玉縄城周辺より出土するかわらけに類似する。戦国期のものであろう。

ま　と　め

本遺跡周辺は、先に述べたとおり、古くから多期にわたる遺物が採集できることが知られ、大規模な集落址の存在が推定されてきた。

調査は約50m²という狭い範囲でしかも深度規制のあるなかで６軒の住居址が確認され、さらに遺構は確認されなかったものの中世のかわらけ、瀬戸窯製品などが、台地上にかなり広範囲に散布していることが把握できた。（註３）

「台山」と称される遺跡地（広範囲の）に対する調査は、本遺跡を含め３件を数えるが、すべての調査面積を合せても、ほんの一画を調査したにすぎない。周辺部はすでに宅地化されており「台山」全体の集落の変遷、中世の様相などはすでに知り得る述もないが、おそらくは北に沖積低地（現・鎌倉市台一帯）をもつ、相当規模の集落が長期間にわたって営まれていたものと考えられる。

なお、調査実施に際し、神奈川県教育庁文化財保護課白石浩之・山本暉久氏、施主保谷三千雄・和雄氏・三橋猛設計事務所三橋猛氏、諸氏・諸機関の御協力、御指導を賜った。記して感謝の意を表したい。

註1.　丑野　毅「神奈川県鎌倉市台遺跡調査報告」昭和49年『人文科学科紀要』東京大学教養学部人文科学科

註2.　鎌倉市山ノ内字藤源治に所在する北鎌倉女学園用地内の発掘調査。未報告ではあるが縄文時代～戦国時代までの遺物・遺構が検出されている。

註3.　註１の報文中に、遺跡内採集のかわらけの他に台山を本遺跡地北で横断する地点からかわらけを採集したとある。又註２の遺跡でもかわらけ等の中世遺物が多く出土している。

▲　調査区全景（調査終了後）

◀　1号住居址　及び
堆積堀

図版 2

▲　1 号住居址及び 3 号住居址

▲　2 号住居址及び 3 号住居址

▲　2 号住居址（北西から）

▲　2 号住居址　1 号炉

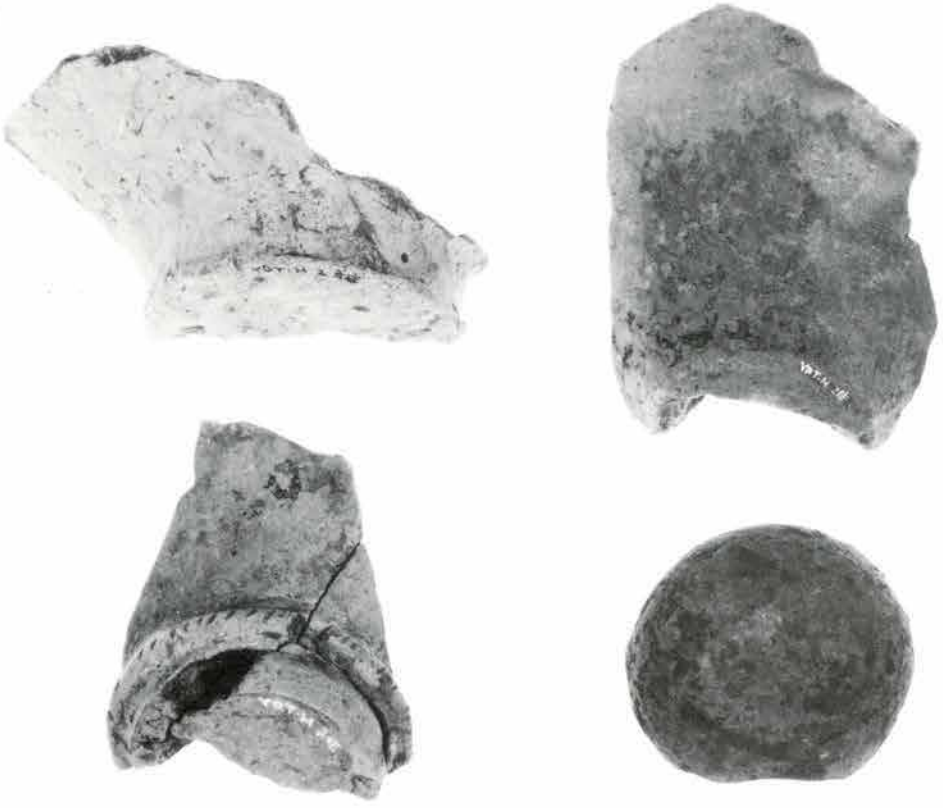
◀ 2 号住居址　2 号炉

▼ 2 号住居址　床面上遺物出土状況

▼ 3 号住居址　覆土中遺物出土状況

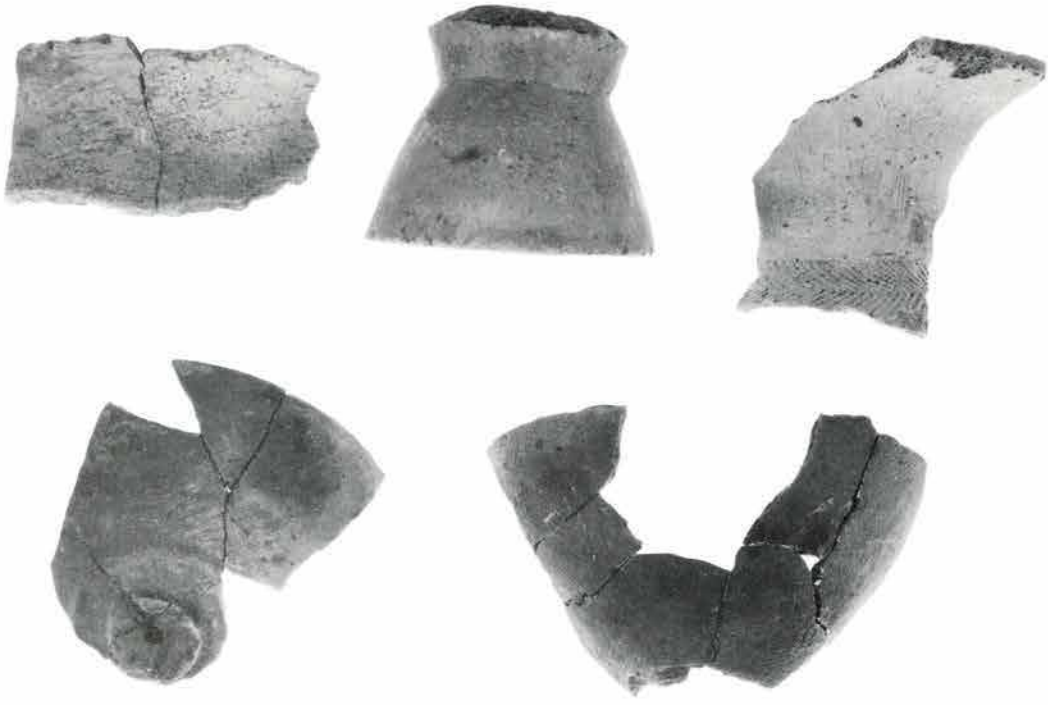
3 号住居址　覆土中遺物出土状況 ▶

図版 4

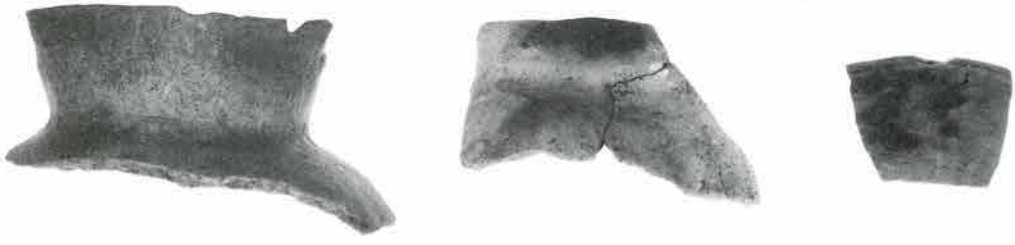


▲ 2号住居址出土遺物

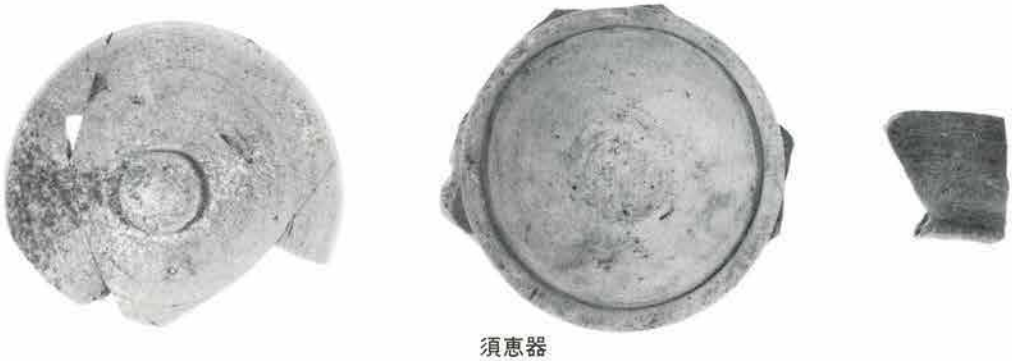
▲ 3号住居址出土壺



弥生式土器



土師器



須恵器

▲ 3 号住居址出土遺物

図版 6

▲石斧

▲ 中世の遺物

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1
昭和59年度発掘調査報告

発行日　昭和60年3月
編　集
発　行　鎌倉市教育委員会
印　刷　朝日オフセット印刷株式会社